

2021

アーツカウンシルしずおか
アニュアルレポート

**ARTS COUNCIL SHIZUOKA
ANNUAL REPORT 2021**



アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

2021
アーツカウンシルしずおか
アニュアルレポート

ARTS COUNCIL SHIZUOKA
ANNUAL REPORT 2021

目次

Contents

05	ご挨拶
06	アーツカウンシルしずおかとは
07	沿革
08	組織体制
09	主な事業内容
10	文化芸術による地域振興プログラム
11	●地域はばたき支援
12	特定非営利活動法人 ACT.JT 静岡支部
13	一般社団法人熱海怪獣映画祭
14	特定非営利活動法人クロスメディアしまだ
15	劇団静岡県史
16	原泉アートプロジェクト
17	かけがわ茶エンナーレ実行委員会
18	特定非営利活動法人日本地域部活動文化部推進本部
19	特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ
20	●地域かがやき支援
21	Usami フェス実行委員会
22	KURURA 制作実行委員会
23	熱海未来音楽祭
24	こころのまま
25	しゃぎりフェスティバル実行委員会
26	藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会
27	浜松いわた信用金庫
28	社会福祉法人ひかりの園（浜松市根洗学園）
29	小松つながり醸造所
30	●地域はじまり支援
31	young 熱海
32	シズオカオーケストラ
33	焼市 YAI-CHI
34	川根本町お茶染め実行委員会
35	MUSIC&ART Support
36	成果報告会（文化芸術による地域振興プログラム）
38	評価制度の運用（文化芸術による地域振興プログラム）
	全国アート NPO フォーラム in 熱海
39	主催事業
40	マイクロ・アート・ワーケーション
43	文化芸術による地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業
44	先進事例視察を通じたネットワークづくり
45	超老芸術
46	オンラインセミナー「お点前ちょうだいいたします」
47	オンライン寄合「へそちゃ会」
48	相談窓口
49	広報資料

ご挨拶

加藤 種男
Kato Taneo



アーツカウンシルしずおかアーツカウンシル長
（公益財団法人静岡県文化財団 副理事長）

アーツカウンシルしずおかは、「すべての県民がつくり手（表現者）」となることを目指し、物事の見方に変化を促し、発想を広げるお手伝いをする組織として、まちづくりや観光、福祉、教育、産業、国際交流等、社会の様々な分野におけるイノベーションのきっかけをつくるなど、芸術文化を活用した創造的な地域づくりを応援しています。

具体的には、誰もが持つ創造力を自由に発揮し、地域資源の活用や社会課題への対応を図る住民主体の取組（アートプロジェクト）の活性化を図るため、助成制度「文化芸術による地域振興プログラム」を設け、社会の様々な分野に軸足を置くアートプロジェクトの担い手“住民プロデューサー”の活動を支援しています。

2021年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域や人との関わり方に制約が生じ、アートと地域の関わり方やアートが担う役割にも変化が見られるようになりました。しかし、そうした状況下でも、公募により採択された22団体によるアートプロジェクトが県内各地で展開されました。そして、何より大きかったのは、地域の中で、さらには地域を超えた様々な連携、ネットワークが形成されたことで、社会創造の大きな原動力となりつつあることです。

併せて、住民プロデューサーの発掘や将来的なアートプロジェクトの創出を期待する「マイクロ・アート・ワーケーション」事業や、企業の力を住民の創造性を発揮する機会づくりに活かしていただく「文化芸術による地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業」の実施を通じ、まちづくり、移住促進、観光、空き家活用、農業、製造業などを事業分野とする企業、団体の皆様との連携も始まりました。

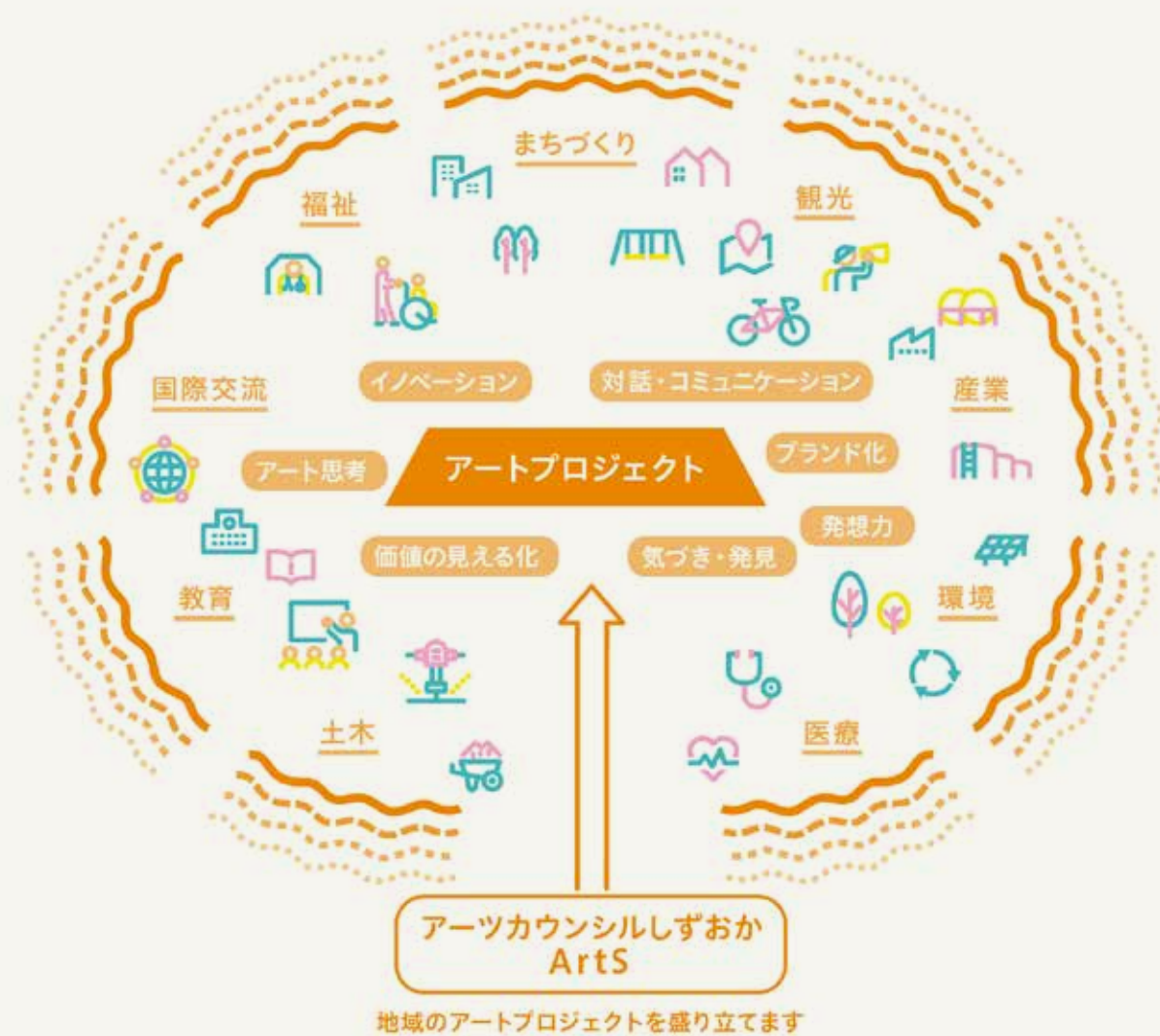
アーツカウンシルしずおかは、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムの中で、社会課題への対応や地域の活性化を目指す住民主体の創造的な活動を支援してきた静岡県の取組をレガシーとして継承・発展させるため、2021年1月に公益財団法人静岡県文化財団内に設置され、2021年4月から本格稼働を開始しました。

この一年、様々な分野で活動する実に多くの方々から叱咤激励のお力添えを頂きました。おかげさまで、試行錯誤の初年度からこうしたご報告ができることに、深く感謝申し上げます。今後も地域社会と芸術文化を結ぶ仕組みをつくり、創造的な地域づくりに貢献してまいります。引き続きのお力添えをお願い申し上げます。

～視点をかえる 発想をひらく～ すべての県民がつくり手

アーツカウンシルしずおかは、「視点をかえる 発想をひらく」をキャッチフレーズに、住民主体のアートプロジェクトの支援を中心として、物事の見方に変化を促し、発想を広げるお手伝いをする組織です。

“すべての県民がつくり手(表現者)”となることを目指して、誰もが持っている創造力が活かされる道をひらき、まちづくりや観光、福祉、教育など社会の様々な分野においてイノベーションが生まれる、創造的な地域づくりに貢献します。



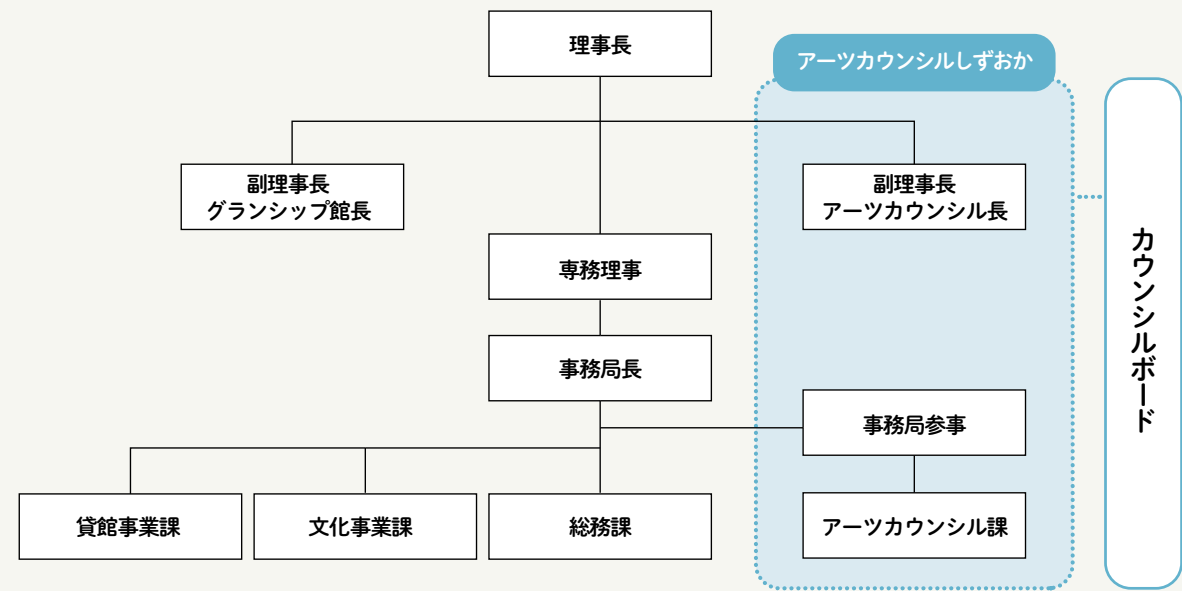
静岡県では、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムの中で、社会の様々な分野と文化・芸術を結び付け、社会課題への対応や地域の活性化を目指す住民主体の創造的な活動(アートプロジェクト)を支援してきました。アーツカウンシルしずおかは、この支援の仕組みをレガシーとして継承・発展させるため、2021年1月、公益財団法人静岡県文化財団内に設置されました。

2013年 9月	2020年オリンピック・パラリンピック夏季大会の開催都市に東京が決定
2014年11月	全国知事会で2020年文化プログラム全国展開提案
2015年11月	文化プログラム「静岡県準備委員会」発足
2016年 5月	静岡県文化プログラム推進委員会発足
2020年 3月	IOCが東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の1年延期を決定
2021年 1月	「アーツカウンシルしずおか」設置
2021年 7月	第32回オリンピック競技大会開会(7月23日～8月 8 日)
2021年 8月	東京2020パラリンピック競技大会開会(8月24日～9月5日)
2021年 9月	静岡県文化プログラム終了

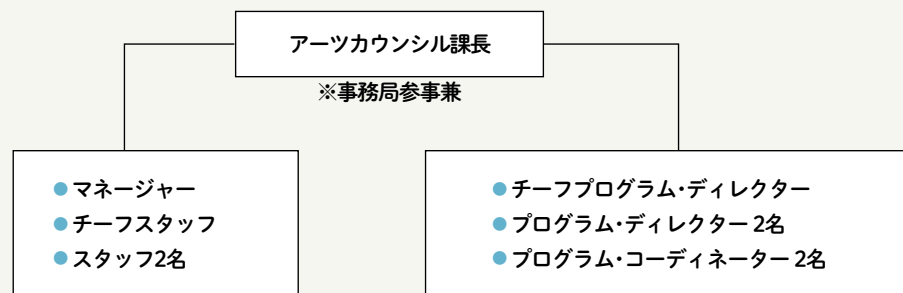


アーツカウンシルしずおか開所式

● 公益財団法人静岡県文化財団



● アーツカウンシル課



● プログラム・ディレクター、プログラム・コーディネーターについて

助成制度を活用してアートプロジェクトを実施する団体に対し、文化・芸術と社会をつなぐアートマネジメントの専門家であるプログラム・ディレクターやコーディネーターが、助言や事業内容の整理などの伴走支援を行います。また、ビジネスや行政などの分野においても随時相談を受けつけ、様々な課題に対する創造的な方策を提案しています。



チーフプログラム
ディレクター
● 櫛野 展正



プログラム
ディレクター
● 北本 麻理



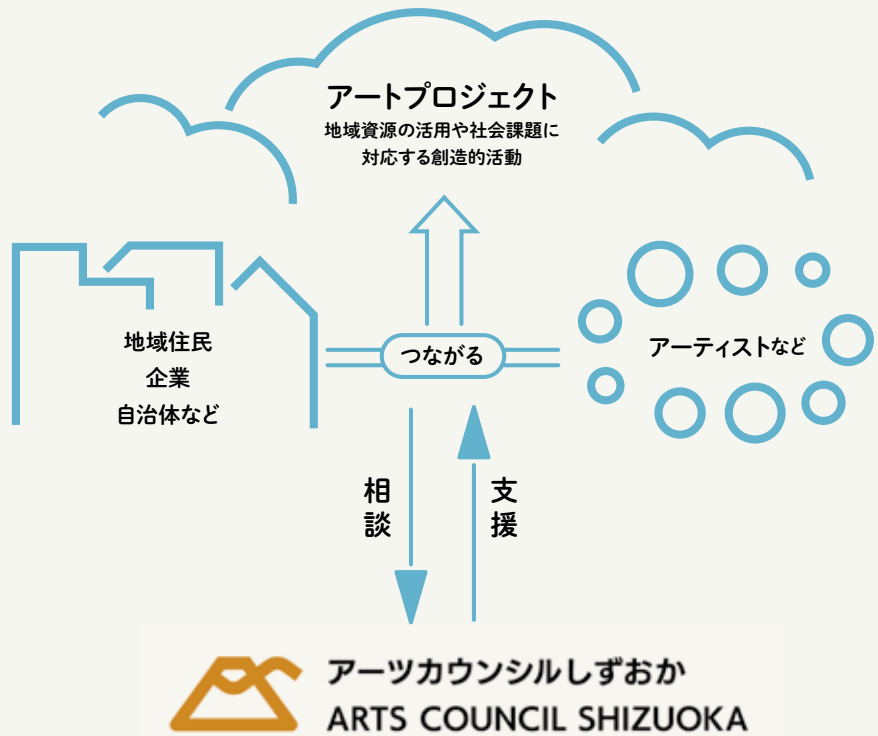
プログラム
ディレクター
● 鈴木 一郎太



プログラム
コーディネーター
● 立石 沙織



プログラム
コーディネーター
● 佐野 直哉 (非常勤)



● 住民主体のアートプロジェクト支援

- 助成、伴走支援
 - ▶ 文化芸術による地域振興プログラム … p10~38
- 住民プロデューサーの発掘
 - ▶ マイクロ・アート・ワーケーション … p40~42
- 先導的な事業の試行
 - ▶ 文化芸術による地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業 … p43

● コーディネート

- 相談窓口 … p48
- セミナー、講演会などの開催
 - ▶ オンラインセミナー「お点前ちょうだいいたします」… p46
- 企業・団体・大学・自治体とのネットワークづくり
 - ▶ 全国アートNPOフォーラム in 熱海 … p38
 - ▶ 先進事例視察を通じたネットワークづくり … p44
- アーティストとのマッチング
 - ▶ マイクロ・アート・ワーケーション (再掲)
 - ▶ 文化芸術による地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業 (再掲)

● 調査研究・政策提言

- 地域資源・文化活動の調査研究
 - ▶ 文化芸術による地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業 (再掲)
 - ▶ 超老芸術 … p45
 - ▶ オンライン寄合「へそちゃ会」… p47
- 自治体、文化団体などへの助言・提言

2021年度 文化芸術による地域振興プログラム

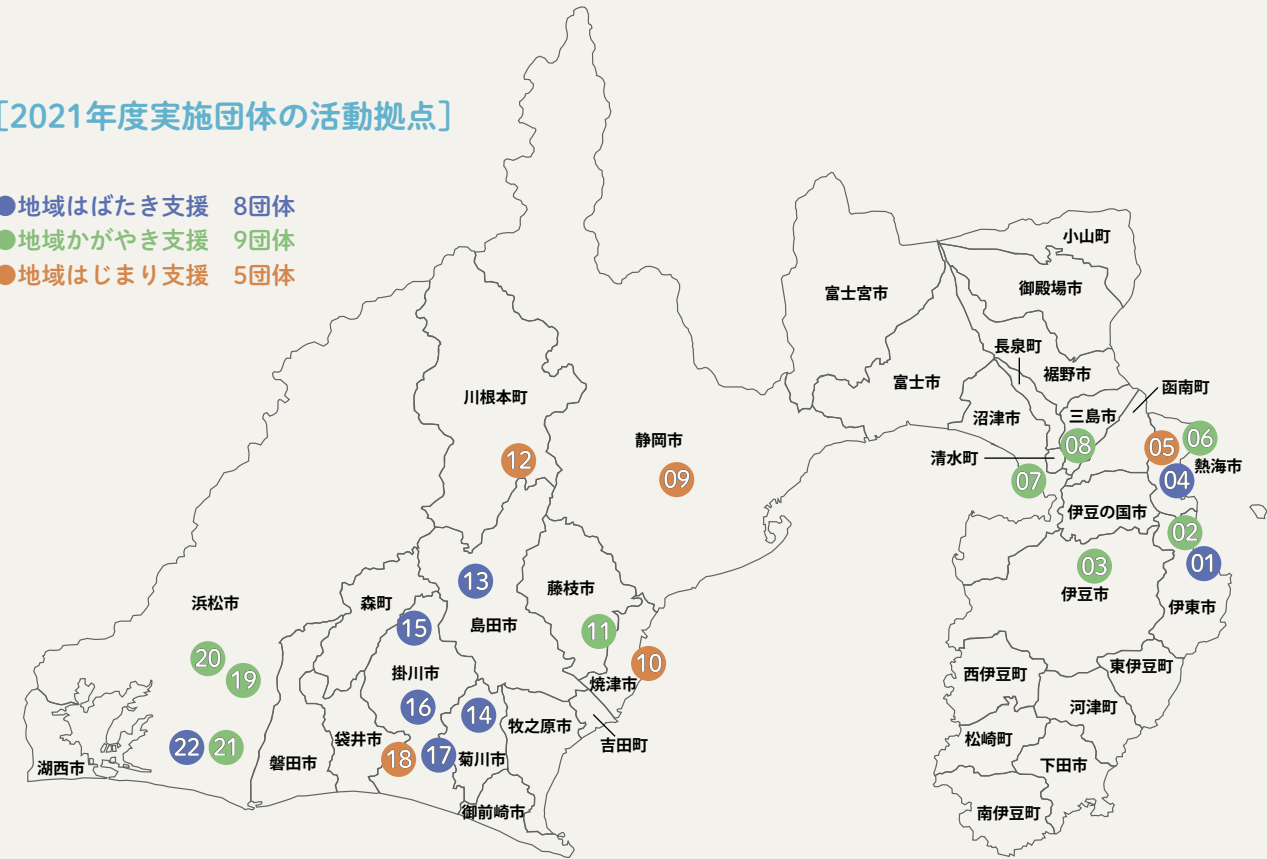
地域資源の活用や社会課題への対応を目指す先駆的な取組「アートプロジェクト」を県内の団体等から公募。
本年度は3つの区分により支援を行い、計22のプロジェクトが各地で展開された。

- 地域はばたき支援(助成金額上限:500万円)
他地域や当該分野のモデルとして、静岡県内外に発信するアートプロジェクト
- 地域かがやき支援(助成金額上限:200万円)
地域の未来をひらくアートプロジェクト
- 地域はじまり支援(助成金額上限:30万円)
アートプロジェクトの実施に向けた試行的な取組

※採択したプロジェクトについては、経費の一部を助成するだけでなく、プロジェクトを進めるに当たっての助言や、
団体等のニーズに合わせた伴走支援を、プログラム・ディレクターやプログラム・コーディネーターが行った。

[2021年度実施団体の活動拠点]

- 地域はばたき支援 8団体
- 地域かがやき支援 9団体
- 地域はじまり支援 5団体



- | | | |
|------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 01 特定非営利活動法人ACT.JT静岡支部 | 09 シズオカオーケストラ | 17 特定非営利活動法人 |
| 02 Usamiフェス実行委員会 | 10 焼市YAI-CHI | 日本地域部活動文化部推進本部 |
| 03 KURURA制作実行委員会 | 11 藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会 | 18 MUSIC&ART Support |
| 04 一般社団法人熱海怪獣映画祭 | 12 川根本町お茶染め実行委員会 | 19 小松つながり醸造所 |
| 05 young熱海 | 13 特定非営利活動法人クロスメディアしまだ | 20 社会福祉法人ひかりの園(浜松市根洗学園) |
| 06 熱海未来音楽祭 | 14 劇団静岡県史 | 21 浜松いわた信用金庫 |
| 07 こころのまま | 15 原泉アートプロジェクト | 22 特定非営利活動法人 |
| 08 しゃぎりフェスティバル実行委員会 | 16 かけがわ茶エンナーレ実行委員会 | クリエイティブサポートレッツ |

文化芸術による地域振興プログラム | 地域はばたき支援

他地域や当該分野のモデルとして、静岡県内外に発信するアートプロジェクトが対象。
共生社会のあり方を提案する福祉施設の事業から、地域に密着した芸術祭まで、
県外からも注目を集める8つのプログラムが実施された。

プログラム名称	団体名	所在地
伊豆のODORIKOフェスティバル〜第二章 ODORIKOプロジェクト2021	特定非営利活動法人ACT.JT静岡支部	伊東市
第4回 熱海怪獣映画祭	一般社団法人熱海怪獣映画祭	熱海市
UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2022	特定非営利活動法人クロスメディアしまだ	島田市
音楽劇『マダム・バタフライ ～三浦環ものがたり～』	劇団静岡県史	菊川市
原泉アートデイズ! 2021	原泉アートプロジェクト	掛川市
かけがわ茶エンナーレ2020+1	かけがわ茶エンナーレ実行委員会	掛川市
新時代の「課外活動」への挑戦! 第2章 ～NPOが参画する文化系・地域部活動の全国展開～	特定非営利活動法人日本地域部活動文化部推進本部	掛川市
「表現未満、」プロジェクト	特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ	浜松市

静岡県東部→中部→西部の順に掲載

特定非営利活動法人ACT.JT静岡支部(伊東市)
伊豆のODORIKOフェスティバル～第二章
ODORIKOプロジェクト2021

●実施日 | ①お話と実演と体験(京劇、バリ舞踊、タイ舞踊) 2021年10/24、12/4 ②伊豆のODORIKOフェスティバル第二章 2021年12/5
●実施場所 | ①東海館 ②伊東市観光会館 map 01



日本とアジアの獅子が一堂に会した

●プログラム概要

伊豆半島の伝統芸能の継承と発展を通じ、世代を越えた地域内の横のつながりを強化することが、伊豆のODORIKOフェスティバルの目的である。全国様々ところで聞かれる郷土芸能の担い手不足の問題は静岡県東部地域においても深刻であるが、地域住民が担い手であるためにフラットな人間関係を結ぶことができるという伝統芸能の特性を活かし、若い世代へのアプローチをするとともに、慣習的な規制の緩和や変更に取り組んでいる。また、伝統芸能に取り組む者同士の地域を越えた交流を促し、課題意識の共有、意見交換等を行っている。

今年度はアジアの芸能へと視野を広げ、中国の京劇や雑技、韓国舞踊、タイ舞踊、インドネシアのバリ舞踊などが、東部地域の郷土芸能と合わせて舞台上上がった。近いルーツを持つ芸能と地域の芸能に触れることから、多様な価値観への理解を促し、国際的な感性を育む狙いがあった。

●団体概要
日本の伝統的な文化芸術の振興を図り、まちづくりや地域経済の活性に寄与することを目的に設立された、「特定非営利活動法人ACT.JT」の静岡支部。

●担当ディレクターによる振り返り

伊東市観光会館にて開催された「伊豆のODORIKOフェスティバル第二章」では、静岡県東部の郷土芸能とアジアの芸能の競演が繰り広げられ、120名のキャストが参加し、300名の観客が鑑賞した。静岡県東部の郷土芸能と共に、中国の京劇や雑技、韓国舞踊、タイ舞踊、インドネシアのバリ舞踊などがステージに上がった。

日本に獅子舞があるように、アジア各国にも獅子の踊りがあり、それぞれに特色のある獅子が一斉にステージに上がった姿はとてもインパクトがあったと同時に多様な表現のあり方を体現した印象を受けた。フェスティバル終了後、自宅に帰って獅子の衣装を自作したという姉弟から写真が届いたとのことだったが、普段芸能が行われる場所から離れたとしても伝わる力があり、子どもたちの心に残っただろうことと想像する。その見た目や振りつけは様々だが、一堂に会する機会ではそれぞれの似ている部分、違う部分に自然と目が向いた。それによってアジアという大きな括りを意識させられた観客や出演者もいたのではないだろうか。(鈴木一郎太)

一般社団法人熱海怪獣映画祭(熱海市)
第4回熱海怪獣映画祭

●実施日 | 2021年11/21～11/23
●実施場所 | 国際観光専門学校熱海校 map 04



「新・怪獣お絵かきコンクール」優秀賞受賞者への副賞 贈呈式

●プログラム概要

熱海市民をはじめ、全国(ひいては世界中)の怪獣映画ファン、映画製作に関わるクリエイターなどを巻き込みながら開催する熱海怪獣映画祭は、今年度で第4回を迎えた。元映画館の建物を会場に、懐かしの人気作から新作まで24本の映画上映を行ったほか、市民参加を促す定番コンテンツとして、「新・怪獣お絵かきコンクール」や地元商店のコラボレーションメニューの開発、それらを周遊できるスタンプラリーを実施した。お絵かきコンクールでは前回の3倍に及ぶ作品数が集まり、認知度の高まりが感じられた。また、新たな試みとして個人や企業による出店ブース「熱海怪獣市場」を設けて17組が参加。映画だけではなく造形やイラストなど、クリエイターの裾野を広げるマーケットとして好評を得た。また、連携イベントとして「全国自主怪獣映画選手権」や「ネオ熱海ムービー祭り」等を展開し、若手クリエイターも関わる多彩なプログラムを提供した。

●担当コーディネーターによる振り返り

●団体概要
怪獣映画や特撮映画にゆかりある熱海で、地元の有志が中心となり、2017年に立ち上げた映画祭。怪獣をテーマに地域を盛り上げ、熱海のブランド化をはかる。

今年度は、昨年から続くコロナ禍に加え、予期せぬ土砂災害が発生。団体内では、その状況下でも「怪獣」をテーマにした映画祭を開催すべきか否か、議論を重ねることになった。怪獣は街を破壊する。その一方で、脅威の姿を通して私たちに「大事なものは何か」を問いかける。今こそ地域の元気を取り戻したいとの願いから、最終的には予定通りの開催に踏み切った。

この街の思いに寄り添おうとする姿勢は、地域に根差した映画祭だからこそとも言える。地元住民を中心とする運営スタッフは、ほぼボランティアで構成され、熱海を盛り上げたいという純粋な思いに共感して集まった人々だ。企画の検討段階にも加わり、経験の長短に関わらず意見を言い合える風通しの良さを持っている。そんな彼らによる手作りの映画祭には、怪獣映画のプロフェッショナルはもとより、その存在に憧れて足を運ぶ若手クリエイターや子どもたちが増えつつある。今回は、市民の約90名がエキストラ、約50名が映画製作に関わったオリジナル映画も誕生した。この多様な関わりを実現する関係人口の拡充こそが、「熱海を怪獣の聖地へ」をキャッチフレーズとする熱海らしい街をつくっていくのではないだろうか。(立石沙織)

特定非営利活動法人クロスメディアしまだ(島田市) UNMANNED無人駅の芸術祭 ／大井川2022

●実施日 | 2022年2/25～3/21 ※プレイベント2021年12/25、26
●実施場所 | 大井川鉄道無人駅とその周辺(島田市及び川根本町)

map 13



地域住民が伐採した約400本の竹で旧駅舎を様変わりさせた上野雄次の「バンブーハウス」

●プログラム概要

大井川鉄道沿線の無人駅を核に開催される地域芸術祭を主軸とした取組。10年の実績を持つまちづくりNPOとしての蓄積と強みを生かし、作品の制作や発表はアーティストと地域住民の密な関わりをベースに進められ、多くの交流が生み出される。2万人を越える来場のあった芸術祭「UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2022」と並行して、市民企画のプラットフォームである「アートプラットフォーム大井川」や、生活や風土を対象とした民俗学的調査を行うリサーチプロジェクト等が展開された。ウェブ版美術手帖「2022年注目の国際芸術祭ベスト6」に選出。

●担当ディレクターによる振り返り

25日間の芸術祭に二ヶ月も先立ち、開幕式典が催された。それ以降、地域内での作品制作が活発になることを鑑みた時期設定であり、地域とアーティストの関わりに重きを置く信念の表現とも言える。作品制作を通じ住民とアーティストの交流が生まれるよう進められる、新規のリサーチプロジェクトは、数年

●団体概要

「スキだらけのまちづくり」をコンセプトに島田市周辺の地域づくりに取り組む団体。近年は、大井川鉄道沿線の無人駅とその周辺を舞台にした『UNMANNED 無人駅の芸術祭』を主軸に活動している。

劇団静岡県史(菊川市) 音楽劇『マダム・バタフライ ～三浦環ものがたり～』

●実施日 | 2022年3/27
●実施場所 | 菊川文化会館アエル 大ホール

map 14



音楽劇『マダム・バタフライ～三浦環ものがたり～』より

●プログラム概要

2020年に放映されたNHK連続テレビ小説『エール』にて柴咲コウ演じる三浦環の登場から中東遠地区に再注目された三浦環。舞台芸術で活躍された方だからこそ取り組んでみようと思案しました。彼女の向かう所どころでは「戦争」と関わることが多く、「声楽家にとって舞台は戦場」と例え、兵士を労い人々を癒し最期まで歌い続けた方でした。開国したばかりの日本、社会の表舞台に立てる機会の少なかった女性が世界で活躍したことは、どれだけスゴイことだったのか、少しでも伝われば嬉しく思います。また、女性が一心に仕事に打ち込むことにも違和感を覚えるならば、それが根強く残る価値観なのかもしれません。しかし常に芸術は新たな価値観を生み出すものではないかと。＜公演パンフレットより＞

●担当ディレクターによる振り返り

プログラム概要に記載しているのは、「劇団静岡県史(以下県史)」の主筆・脚本・演出である松尾朋虎さんが公演パン

フレットに掲載したメッセージだ。松尾さんはSPAC(公益財団法人静岡県舞台芸術センター/Shizuoka Performing Arts Center)の制作から、SPAC県民劇団として「県史」を立ち上げ、現在は菊川市を中心に演劇活動を行っている。「県史」は静岡にまつわる偉人を主題にした作品を創作しているが、その偉人は歴史教科書に載る人物だけでなく、地元の人もあまり名前を知らない場合もある。今回取り上げた三浦環も知名度は高くないだろうがその軌跡を描くことで、三浦環の存在が日本の音楽界に与えた影響を知るにとどまらず、男性だけで構成される社会に物怖じせず踏み込んでいった様子まで窺い知ることができた。現在の私たちは過去を振り返ることができるので、「当時は大変だっただろうなあ」と簡単に考えるが、静岡に縁のある三浦が成し遂げたこと、残したことを「大変だっただろうなあ」の一言に収めてしまうのはもったいない。つまり、演劇を通して三浦を知った私たちは、次なる三浦になれているのか、と考える機会としたいわけである。「県史」は出演者を市民から集い、主題にする人物を知るための勉強会も稽古に取り入れている。市民の出演者から、次なる三浦環が生まれるかもしれないのだ。(北本麻理)

原泉アートプロジェクト(掛川市) 原泉アートデイズ！2021

●団体概要

掛川市最北部に位置する原泉地区で、アーティスト・イン・レジデンス(滞在型制作)の環境を整え、展覧会『原泉アートデイズ！』を開催。そのプロセスの中で、サステナビリティという概念にもとづき常に進化し続けている団体。

●実施日 | 2021年10/14～11/28(関連企画「OPEN AIR SPACE」2021年5/25～8/25)
●実施場所 | 掛川市原泉地区全域

map 15



静岡県掛川市北部の原泉地区で開催された「原泉アートデイズ!」は4回目を迎えた

●プログラム概要

原泉アートプロジェクトでは、掛川市北部にある500名ほどが居住する5つの集落である原泉地区を舞台に、国内外からアーティストが一定期間滞在し、リサーチ活動や作品制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス」に特化した現代アートのイベント「原泉アートデイズ!」を2018年より継続開催している。

4回目となる今回は、「相互作用」をテーマに国内外から12組のアーティストが参加。多様な企画が展開される中で、「レジデンシーミールズ」と題したプロジェクトは、滞在中の毎日の食事や差し入れを記録・公開することで、食を通じて地域資源とアーティストの結びつきを可視化した。原泉地区の南北約8Kmにわたって、旧茶工場や空き寺、空き家などを活用した7つの会場には多様なアート作品が点在し、延べ3000名を超える来場者を記録した。

●担当ディレクターによる振り返り

アーティストである都築透さんの企画により、使われな

くなった茶工場をアーティストの拠点として開放し、YouTubeで24時間配信する企画「OPEN AIR SPACE」が開催された。画面に映し出されたのは、アーティストが制作する様子だけでなく、何気ない対話や共に食卓を囲む場面、何もしていない時間など生活の全てだ。代表の羽鳥祐子さんが、この地でのアートプロジェクトを「祝祭的なものではなく、日々の暮らしの延長線にあるもの」と位置付けているように、アーティストの日常が映し出された画面から、アーティストが原泉地区で自然や環境と共存しながら生活し制作するというサステナブルな暮らしの姿を垣間見ることができた。ただ、こうしたアーティストを支えているのは、若手サポーターだけではない。訪問時に「原泉アートデイズ! 2021」の受付をしていた年配の女性が「羽鳥さんのためなら私は何でもする」と発言していたように、本プロジェクトは年々地域との連携を強めている。

また、ともすれば閉鎖的になりがちなアーティスト・イン・レジデンスを外に開くために、美術評論家の福住廉さんを招聘し、2日間かけて視察を行なって頂いた。次年度には講演会を計画するなど、そのネットワークは事業拡大に向けて盤石なものになりつつあるようだ。(櫛野展正)

かけがわ茶エンナーレ実行委員会(掛川市) かけがわ茶エンナーレ2020+1

●団体概要

掛川市の地域資源である「茶・茶産地」と「アート」を融合させ、新たな「茶文化」を創造することを目的に、3年に1回の地域芸術祭『かけがわ茶エンナーレ』を企画、実施している。

●実施日 | 2021年10/16～11/14
●実施場所 | 掛川市内全域

map 16



「茶の周囲としての急須群」 UO(松田優／谷雄一郎)／原谷民家(北西エリア)

●プログラム概要

昨年度から延期して「かけがわ茶エンナーレ2020+1」となって開催。掛川市全域を4つのエリアおよびオンラインに分け、芸術祭プログラムを実施。土地の風景や地域の特徴を生かし、住民との交流を交えながら制作した作品もあった。メインプログラムの他に、住民が主体となる参加型のプログラムも充実していた。さらには、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンライン上での展開に工夫が見られ、市議会議場での「一本で複数の木(狩野哲郎)」に始まり、プログラム紹介を映像化しウェブにあげるなど、細部に渡る工夫がみられた。城下町であるまちなかエリア、日坂宿場町の東エリア、太平洋を望み畑地が広がる南エリア、とすでにそれぞれの特徴を持つが、地域にある歴史的建造物、図書館や展望台、空き地などを展示会場にすることで、地域の特徴への考察と眼差しをダイレクトに感じる作品が多く見られた。

●担当ディレクターによる振り返り

2017年、デンマークの首都コペンハーゲンが、「観光都市の

終わり」を宣言した。強烈なメッセージは世界中を駆け抜け、「観光都市」のあり方に一石を投じた。特に強く肯けたのは、現地住民と旅行者が共に経験を共有し、新たな観光を目指し共栄していこうという考え。「観光地」に「観光」しに行くのではなく、「生活のありのまま」を「経験」しに行き、交流から生まれるものを観光資源にする。北欧のコペンハーゲンからのメッセージは、先端を走っているようだが、実はヨーロッパの他の都市と比べ観光資源に乏しいというのも現実らしい。その中でひねり出したのが、このアイデアだったのだろう。

かけがわ茶エンナーレを通して感じたのは、掛川市内全域を見渡してみると、急かsekしてない暮らしの様子がまだあちこちに残っている。この暮らしの様子をどのようにして旅行者と共有し、ゆくゆく観光資源へと捉えていくのか。あるいは、観光資源とは何を意味するのか。名所旧跡のような有形のものを指すのか。人々が生み出す文化は、無形のものも存在しているのではないかと。

茶エンナーレを行うことで、時間はかかると思うが、あらたな文化が育まれることを望む。なぜならば、この道程とコペンハーゲンの宣言が意味することは、同じことだと考えるからである。(北本麻理)

特定非営利活動法人日本地域部活動文化部推進本部(掛川市)
新時代の「課外活動」への挑戦！第2章
～NPOが参画する文化系・地域部活動の全国展開～

●実施期間 | 2021年7月～12月 ※部活動は通年、火曜と木曜を中心に継続実施
●実施場所 | 掛川美感ホール、まちかどLABOLATORY、Pocca本部1Fスタジオなど

map 17



地域部活Pocca本部経由で東京の大学講師とオンライン接続して実施した「テレバカツ」の様子(会場:掛川市美感ホール)

●プログラム概要

2018年に地域部活・掛川未来創造部paletteとしてスタートした、『地域部活』。複数年の活動を経る中で、参加する中学生が主体的に自分たちの発表したいことを企画し運営する活動へとシフトした。今年度は活動地域である掛川市で行われた「かけがわ茶エンナーレ」に、開会式の運営、進行、司会として参加、また「プラスワンラボ！奮闘記」としてオンラインでの活動紹介と発信も行なった。対面での活動が規制されている時期は、zoomを活用し全体の挨拶から、ブレイクアウトルームでの個別グループ活動(演劇、IT、など)を実施して活動を継続させた。

●担当ディレクターによる振り返り

zoomでのグループ活動を見学したことがある。その中で行われていた話し合いの方法が、素晴らしかった。上級生と思われる生徒が話し合いの進行をしているのだが、下級生を含むグループメンバー全員が意見を言えるように、穏やかにかつ冷静に言葉を投げかけていた。その言葉を聞いたメン

●団体概要
中学校や高等学校で行われてきた部活動を地域で行う形態『地域部活』の全国展開をめざし、部活動改革の実践と研究をベースに、未来を見据えた地域文化振興に寄与することを目的としている。

バーも、臆することもなく自分の考えを繰り出すように発言していた。

『地域部活』の様子から、また代表の齊藤さんの言葉から考察することは、社会を形成しているのは決して大人だけではない、という複数の意味をもつ考えだ。まず、生徒は学校の中だけで暮らしている訳ではない。大人も職場の中だけで暮らしていない。少なくとも地域という社会で暮らしている。では、地域社会において、自分自身と誰かに対しての自由と責任を両立させて存在できているだろうか。『地域部活』において、大人が実行しそびれている自由と責任を、生徒たちが果たす姿をいくつも見た。大人でさえも不完全なことを、生徒が実現しつつあるのだ。

齊藤さんは、地域には、目的の価値を高める企画力とプロデュース力を持つ人材が、必要であると言う。要は、考える・伝えるを繰り返し、失敗しながらも成し遂げる達成感を共に味わい、共に得た気づきをまた別の誰かに手渡していく、という、この繰り返し、繋がる、というシステムが現在の地域には希薄ゆえ、システムを作り出す企画力とプロデュース力の必要性を感じるのだろう。『地域部活』は既存のクラブ活動ではなく、「地域プロデュース活動」への序章なのである。(北本麻理)

特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ(浜松市)
表現未満、プロジェクト

●実施日 | [オン・ライン・クロスロード] 2021年11/3～11/7
●実施場所 | 旧松菱百貨店跡地(浜松市)

map 22



5日間のイベント「オン・ライン・クロスロード」では、浜松市の旧松菱百貨店跡地を20年ぶりに開放した

●プログラム概要

旧松菱百貨店跡地を20年ぶりに開放し、街の新しい賑わいのあり方を検証する5日間のイベント「オン・ライン・クロスロード」を開催した。人が行き来することの象徴として交差点をつくるアートプロジェクトが実施され、飲食店や物販店が outletsしたマルシェや多彩な音楽ステージ、国内外の研究者によるトークイベントなど多様なプログラムを市民協働で実施したことで、アートによる地域共生社会のモデルが提案された。

また、日常の中の音楽や音楽とすら呼べなくても、誰かが大切にしている表現を真剣に見つめて言葉にしていこうとする雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!」は、全国各地で催されただけでなく、世界進出に向けた準備も進められた。

●担当ディレクターによる振り返り

誰もがもっている自分を表す方法や、本人が大切にしていることを、取るに足らないことと一方的に判断しないで、その行為こそが文化創造の軸であるとする考え方である

●団体概要
全ての人々が互いに理解し分かち合い、共生することのできる社会づくりを行う団体。浜松中心市街地の活動拠点「たけし文化センター連尺町」が、地域の文化創造発信拠点となることを目指している。

「表現未満、」プロジェクトをクリエイティブサポートレッツは2016年より推進してきた。本団体は障害福祉をアートを通じて社会化するという意図で、これまで福祉やアートの分野に風穴を開けてきたが、今回の最大の功績は浜松市の中心街の象徴だった旧松菱百貨店跡地を開放したことにある。

会期中、依然として旧松菱百貨店跡地はフェンスに囲まれたままだったが、そこでステージやマルシェを開催するなどして、コロナ禍でも人と人が交流し、賑わうことのできる場を創出したことが、地域の人たちからも好評を博し、既に次回開催を熱望する声も上がっている。それは同時に、障害のある人の居場所を福祉施設だけではなく街中にも広げる試みにも直結している。

本来、中心市街地とは、街に生活する人々やそこを訪れる人々にとっての共有の場であり、社会資本的要素を兼ね備えているものだ。多くの市民や団体を巻き込んだこうした取組は、従来の商業集積に依存した中心市街地のあり方を再考する契機となり、地域の資源を地域コミュニティが共同管理するという「ローカル・コモンズ」のあり方を提唱していると言えるだろう。(櫛野展正)

文化芸術による地域振興プログラム | 地域かがやき支援

企業が取り組む異業種連携、子どもたちによる地域情報誌づくりなど、アートでコミュニティを紡ぎ、地域の未来をひらく9つのアートプロジェクトが多彩に展開した。

プログラム名称	団体名	所在地
Usamiフェス2021	Usamiフェス実行委員会	伊東市
子どもローカルマガジンプロジェクトCOLOMAGA 伊豆市版 KURURA(くるら)制作活動	KURURA制作実行委員会	伊豆市
第3回熱海未来音楽祭2021	熱海未来音楽祭	熱海市
心のままアートプロジェクト	こころのまま	沼津市
第5回しゃぎりフェスティバル	しゃぎりフェスティバル実行委員会	三島市
藤枝ノ演劇祭	藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会	藤枝市
FUSEコラボレーション1.0 ～様々な出会いが新しい価値を創造する～	浜松いわた信用金庫	浜松市
「福祉」と「アート」の豊かな関係をシェアするための対話	社会福祉法人ひかりの園(浜松市根洗学園)	浜松市
人をつなげる地域をつなげる醸造プロジェクト	小松つながり醸造所	浜松市

静岡県東部→中部→西部の順に掲載

Usamiフェス実行委員会(伊東市) Usamiフェス2021

●団体概要
「伊豆」「宇佐美」「海」をテーマに、飲食、物販、体験、ステージイベントが一体となった『Usamiフェス』を年一回開催し、地域内外の人々の交流の機会を創出している。

●実施日 | 2021年11/14 ※アフターイベント12/19
●実施場所 | 宇佐美留田浜辺公園、カワグチャ(アフターイベント)

map 02



コロナ禍だからこそ宇佐美地域の若者世代を巻き込んで盛り上げた

●プログラム概要

地元有志が集まって実行委員会形式で毎年開催し、今年度で10年目を迎えた。元々は地域外の人にとって、宇佐美の観光の目玉のひとつに育てたい、との想いで始めたものの、ここ2年間はコロナ禍のため、地域住民を主な対象として開催したが、図らずも地域資源の再発見の機会となった。例えば分散会場での開催による旧街道の歴史発見や地元在住のアーティストとの関係構築、地元中学生や大学生の積極的な協働の機会の創造などである。

海辺の会場に戻った今年度は、飲食、物販、クラフトのお店が約40店並び、ステージでは地元のダンスチームによるパフォーマンス、プロの大道芸やファイヤーダンスが展開された。

展示ブースでは10周年記念の思い出フォトコラージュや、造形作家たたらなおき氏と地元中学生による昭和の懐かしい宇佐美の駅前商店街を再現した段ボールジオラマの展示、さらに地元中学生制作のジャイアントフラワー200個を飾りつけたインスタ映えスポットや、来場者アンケートを兼ねた参加型ブースも設置した。他にも地元在住ミュージシャン

小島大介氏制作の空き瓶や空き缶を利用した手作り楽器の演奏体験、アーティスト三枝文子氏による幻想的な灯籠などアート要素を積極的に取り入れた内容となった。

●担当コーディネーターによる振り返り

今年度は10年目を迎え、これまで運営を担ってきた世代から次世代への継承を喫緊の課題として取り組んでいくため、まずは地元の中学生との協働に力を入れていこう、と方向性を定めた。その結果、関係者の温かな理解もあり、ジオラマ展示のワークショップや、ジャイアントフラワーの制作、幼稚園へのジャイアントフラワー寄贈セレモニーなど、中学生の積極的な参加の機会を創ることができた。

また本フェスの9年間の軌跡をたどる展示とともに、地域参加型の作品も取り入れた。さらに若い世代にはステージプロデュースを任せる、関わってくれた地域住民や中学生への感謝の印としてのアフターイベント開催など、地域や若者との協働を意識した展開を心がけたことで、次年度以降の運営スタイルが見えてきたのではないだろうか。

(佐野直哉)

KURURA制作実行委員会(伊豆市)
子どもローカルマガジンプロジェクト COLOMAGA伊豆市版
「KURURA(くるら)」制作活動

●実施期間 | 2021年4月～12月
●実施場所 | 伊豆市・修善寺周辺エリア

map 03



編集・執筆・写真撮影のスキルを身につけて、小学生が直接取材し、マガジンに仕上げている

●プログラム概要

本活動は、子どもたちが体験や取材を通して地域の魅力を再発見し、地域への愛着を持つようになること、子どもたちのクリエイティビティを育むこと、「若年層の人口流出」という地域課題を持つ他の地域へ、本活動の波及を図ることを目的としている。「10年後の地域を支える人材を育てる活動」であり、SDGs No.4「教育」、No.11「まちづくり」の実践活動として高い評価を得ている。

今年のテーマは「+IZU」(プラス伊豆)。子どもたちが会議を重ね、「伊豆市内にも最近オシャレなカフェとか増えているけど、都会と違うのは、伊豆にしかない風景や歴史がプラスされているところだね」から決定した。伊豆市内の小学校4年生～中学生まで20名の子どもたちが、プロカメラマン・新聞記者・ライター・デザイナー・編集者からのレクチャーを受け、子どもたち自身が取材をした上で、文章やイラストを作成、最後にプロによって仕上げられたマガジンは、約半年にわたる活動の集大成として完成発表会にて子どもたちに配布された。

子どもたちが取材活動で再発見した「近くに住んでい

●団体概要

伊豆地域の子どもたちが、プロのデザイナーと協働して地域情報誌「KURURA(くるら)」を制作する活動を通して、地元に対する理解と愛着を深めるきっかけをつくっている。

でも知らなかった地域の良いところ」が、完成したマガジンに多く紹介されている。

●担当コーディネーターによる振り返り

9回の発行を重ねたKURURAでは、この活動を続けたい、と高校生が中心となって2017年から「子ども編集部」が発足した。子ども編集長を中心にテーマや取材先の決定、取材のサポートや講座の司会進行を担っている。さらに「子ども編集部」と大人で構成される「実行委員会」をつなぐ存在であり、子どもたちの身近な存在でもある伊豆周辺の大学生の「コネクトチーム」は、実行委員会が担っていた役割を担うようになった。成果発表会をはじめとする主要なイベントはほとんどコネクトチームが仕切っている。このように事業運営の自立に向けての準備は万端である。その活動を見守りつつ実行委員会とは今後の資金調達、他地域への波及について話してきたが、KURURAらしい方法論を見出しつつある。今後、実行委員会の役割が事業戦略・戦術面に集中することで、より盤石な組織に育っていくだろう。(佐野直哉)

熱海未来音楽祭(熱海市)
第3回熱海未来音楽祭2021

●実施日 | 2021年10/2、10/16、10/17
●実施場所 | 起雲閣、熱海銀座、熱海サンビーチほか

map 06



能楽や語り芸、人形劇、ダンス等と即興演奏のコラボによる多彩な演目(ライブ『大空にとりなしの祈りあり』より) 撮影:木村雅章

●プログラム概要

温泉と海で有名な観光地。首都圏からたくさんの人々が“観光”をしにやってくる。故に、熱海市内には観光業に従事する人も多いと聞く。一見事足りていそうな地域に、なぜ「未来音楽祭」なのか。この音楽祭は熱海市出身、在住の音楽家・巻上公一さんのもとに、多彩なジャンルのアーティストが会しパフォーマンスを繰り広げる。新型コロナや土石流災害に、巻上さんたちも気持ちが落ち込む時期が続いた。音楽祭では「祈り」をテーマに熱海内外のアーティストたちが、気持ちを響きあわせ、見ている、聴いている観客も、目の前に広がる音楽世界に没入していた。ウイルスや災害や日々の暮らしと向き合う「いま、ここ」を超えた「未来」が、“観光客”ではない地域住民へと顕され、表現に没入する時間が「未来」へと気持ちを向ける音楽祭となった。

●担当ディレクターによる振り返り

振り返りを書く担当・北本は、伴走支援を続けながらいつも悩んでいる。何にいつも悩んでいるかというと、「芸術のわ

からなさ」である。正確には、「芸術のわからなさ」はわかるものの、わかる必要があるものなのか、という誰も答えを求めてもいない“問い”が付き纏うことに悩んでいる。けれども、いつもいつも悩んではみるもので、何かの拍子にふと“考え方”に至る瞬間がある。私たちはこの世に生を受けた瞬間、同時に死に向かって生きている。思春期ぐらいの頃に「死の訪れ」を意識することもあるだろうが、1分後、1時間後、1日後、死が訪れるかもしれない、と毎秒、毎日考えてはいないだろう。毎秒、毎日「死の訪れ」を考えずに済ますことと、「芸術のわからなさ」は似ている。おおよその人は、いつ死が訪れるかを「わからない」として、受け入れて生きているのだから、「芸術」のわからないも受け入れることができるはずである。

私は、熱海で開催される音楽祭に、そんな哲学的テーマを嗅ぎ取っている。そして少しずつではあるが、この音楽祭に嗅ぎ取っている人がこの音楽祭に寄り合いつつある。嗅ぎ取った人たちが何を残せるか、未来に答えがあるかわからないから、とりあえずいまは“考え方”をたくさん持ってみよう、熱海で一緒に考えよう、という場と機会が、「音楽祭」という名のアートプロジェクトなのだ。(北本麻理)

こころのまま(沼津市) 心のままアートプロジェクト

●実施日 | ①屋外ブラッシュアート制作イベント 2021年10/23 ②屋内ウィンドウアート制作イベント 2021年11/22～2022年1/31
●実施場所 | ①沼津港外港、地球のかげら(福祉施設・沼津市) ②沼津港大型展望水門びゅうお



沼津港外港の30メートルの矢板に、障害のある子どもたちや高校生、アーティストらが力を合わせて壁画を制作した

●プログラム概要

沼津港外港の30メートルの矢板に、ペンキ入りの水風船や水鉄砲を使って、障害のある子どもたちや高校生、アーティストらが力を合わせて壁画を制作。現地で参加することができない障害のある子どもたちは、会場とオンラインで繋いだ福祉施設で作品制作を行なった。また、沼津港大型展望水門びゅうおの窓には、障害のある子どもたちを始めとして多様な属性の人たちが水溶性チョークで絵を描くなど、障害特性などが理由で社会参加の難しい当事者やその家族が地域との繋がりをつくるきっかけを提供した。

さらに、共同制作の様子を撮影した映像をYouTubeで配信したりドキュメントブックを制作したりと、現地に足を運ぶことができなかった人たちに対しても活動の周知を図っていった。

●担当ディレクターによる振り返り

団体の特徴として、活動が評価を受け、多くの企業から協賛を集めていることが挙げられるが、中でも日本ペイント

●団体概要
障害特性など様々な理由で社会参加が難しい当事者やその家族が、地域とのつながりを持ち、地域における多様なつながりが強くなることを目指して、アート作品の制作・展示などを通した「環境づくり」や「仲間づくり」に取り組んでいる。

株式会社と日本ペイントホールディングス株式会社からは水性塗料やTシャツの協賛を受け、それらを使って表現活動を展開していった。例えば、沼津港外港で開催された壁画の共同制作では、大作に初挑戦する障害のある子どもたちの生き生きとした表情が印象的だった。中には「この範囲の内側に描いてね」と印をした外側に平気で描いてしまう人もいたし、制作に飽きてオンラインで福祉施設と中継していた画面に夢中になっている人もいた。しかし、そうした様子を高校生や大人たちは決して否定することなく、アーティストもサポート役に徹するなど、現場の誰もが障害のある人たちの存在について肯定し、理解を示していた。

また、ドキュメントブックで中心的存在として取り上げられていたのは、福祉施設で創作活動を繰り広げた重い障害のある子どもたちだ。作業療法士などが子どもたちの思いを汲み取って介在しながら制作をする場面も見られたが、ライターが丁寧に記述していったことで、作業療法士や母親が日頃どのような方法で障害のある子どもたちと意思疎通を行なっているかなど、その実践を垣間見ることができた。こうした取り組みは、団体が目指している「障害のある人を中心とした多様性あふれる社会を実現したい」という姿勢を一貫して体現したものになっていた。(櫛野展正)

しゃぎりフェスティバル実行委員会(三島市) 第5回しゃぎりフェスティバル

●実施日 | 2022年1/10
●実施場所 | 三島市民文化会館ゆうゆうホール 大ホール



背景に大きくカウントダウンが映し出される中、舞台上で行われた伝言ゲームのようす

●プログラム概要

発祥から450年経つと言われる祭り囃子の「しゃぎり」を、敢えて祭り本体から切り離し、年1回開催の「しゃぎりフェスティバル」を軸に、その持続的発展に向けた活動を展開している。しゃぎりは通常より多い人数編成で鳴らされる摺り鉦が特徴的で、演奏中は隣の人と会話するのも困難なほどの大音量でかき鳴らされる。今年度はその音の大きさに着目し、しゃぎりフェスティバルにおいて伝言ゲームが新たに取り入れられ、同時にPR映像の撮影も舞台上で行われた。各町でしゃぎりを継承する人達がメンバーとなる団体らしく、お祭り好きで、とにかく楽しむことが基本にあるが、しゃぎりの発展のため、毎年のように新しい挑戦に取り組むことが特徴のひとつと言える。

●担当ディレクターによる振り返り

しゃぎりフェスティバル開始当初からの思いのひとつに、しゃぎりを伝えたいというものがある。もちろん毎年8

●団体概要
三島市で450年続く伝統芸能「三島囃子」のうち、江戸時代に発祥したとされる祭り囃子「しゃぎり」の持続的な発展をめざし、三島市各町内のしゃぎり保存会が会員となり、①周囲への理解 ②自己研鑽 ③後継者育成を柱とした事業を行う。

月15日から3日間行われる三嶋大祭りや、このしゃぎりフェスティバルの会場に足を運んでもらえるのが臨場感という意味では一番だろう。しかし、違った切り口での表現を模索するべく、フェスティバル開催と併せて動画制作にも取り組んでいる。しゃぎりの特徴である大編成の摺り鉦がかき鳴らす音を、実行委員会では「爆音」と呼び、伝えたいと考えている。その音の中では隣の人との会話もままならないということから着想し、今年度は伝言ゲームを使った表現を試みた。

フェスティバルの舞台上に全ての参加町が揃い、フィナーレでの演奏権をかけて伝言ゲームで競い合う。町ごと5名が中央に並び言葉を伝える際、それ以外の町が演奏によってそれを阻むというものだ。結果、すべての町が5名全員に届けることはできず、飛び入りで参加した司会役の日大三島高校放送部だけが成功するというオチまでついた。形にこだわらず、柔軟に新たな物事を取りこむ姿勢は、「爆音」と並び、しゃぎりの精神的な特徴であるように思う。

ちなみに、しゃぎりフェスティバルは三島市民文化会館のホールで開催されたのだが、ホールでのイベントに先駆け入口で耳栓が配られたのは後にも先にもこの日だけだっただろう。(鈴木一郎太)

藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会(藤枝市)
藤枝ノ演劇祭

●実施日 | 2022年3/5、3/6
●実施場所 | 藤枝市旧東海道エリア、茶町、蓮華寺池周辺

map 11



蓮華寺池公園でのパフォーマンスの様子

●プログラム概要

藤枝市在住の脚本家・演出家がフェスティバル・ディレクターを務める演劇祭。藤枝市にある白子名店街にある白子ノ劇場を中心に、徒歩圏内にある蓮華寺池公園、大慶寺、茶工場跡のひとことカフェ、生涯学習センターで演劇公演が上演された。各会場をつなぐ道中では、FUJICOフェスタやミニマルシェも開催され、絶え間なく丸一日、藤枝市のこの界隈を楽しめるような仕掛けが満載となっていた。風は強かったが天気に恵まれ、春の訪れを感じながら街の歴史や文化を、遊び心を持って楽しめることができた。演目は社会派のもの、100年ほど前の岸田國士の作品、内面と比喻が交差するものなど、観客の思考を刺激するラインナップとなっていた。客席には藤枝市民が多く、この演劇祭への期待と応援の気持ちを持って来場しているのを感じた。

●担当ディレクターによる振り返り

「演劇祭でまちづくり」ではなく「まちがつくる演劇祭」。第一回の「藤枝ノ演劇祭」を体験して編み出した、私が感じたテーマ

●団体概要

「まちの記憶」を題材とした演劇作品の創作・上演等を通して、藤枝宿の白子名店街を中心にまちの潜在的資源を発掘し、地域の活性化をはかる。

である。第一回目の今回は「果たしてまちが演劇祭をつくっていたか?」という言葉がより正確であると思うが、今後への期待をとて感じることができた。さて、どのようにして「まちがつくる」ことを可能にするのか。実は、何も難しいことではない。演劇公演が行われるまでの過程で、必ず作品制作または稽古というものがある。制作環境はおおよそ演出家、出演者、演出部と呼ばれる技術スタッフ、作品上演を取りまとめる制作スタッフといった関係者のみが立ち会うものであり、舞台上で上演されるまでは関係者以外の者に作品が晒されることが、まずない。この制作過程で、藤枝市民に参加してもらい、感想や自分の経験を語ってもらうのである。これは「藤枝ノ演劇祭」とある作品を見て、思いついた。作品をよりよくするために、制作過程に関係者以外の人に見てもらい、その作品がどのように見えているか、感じ取られているかというフィードバックを取り込む方法。上に挙げたのは一例であるが、「藤枝ノ演劇祭」の観客が、自分ごととして参加している姿勢を感じ取り、考えるに至った「まちがつくる演劇祭」の手法である。他にもいろいろ取り組めることがあると思う。果たして、フェスティバル・ディレクターや実行委員は、どのような取り組みで「まちがつくる」ことを可能にしていけるのか。これからの動きを楽しみにしている。(北本麻理)

浜松いわた信用金庫(浜松市)
FUSEコラボレーション1.0
～様々な出会いが新しい価値を創造する～

●実施期間 | 2021年11月～2022年3月
●実施場所 | Co-Start Up Space and Community FUSE

map 21



浜松の産業を牽引してきた製造業の廃材で生まれた作品はFUSEのカフェスペースで継続展示される

●プログラム概要

ものづくりの街・浜松の中心市街地に位置するFUSE。そこに集まる製造業、IT業、クリエイター(デザイナーや建築家など)といった異なる業界の人々が融合する新しいコミュニティ創出を目指して、製造業の廃材を素材に、新しい価値や役割を持つ家具や什器の共同制作を行った。浜松市郊外や県西部に工場を持つ中小企業への参加交渉から始め、11月に廃材を探す工場ツアー、12月に集めた廃材でアイデアを出しあう意見交換会を開いた。自主的に他社の廃材と自社の技術を組み合わせて試作品をつくる企業も現れ、1月には一般参加者も含めた創作イベントを開催。参加企業の中から親子で参加する姿が見られるなど、普段とは異なる人々がFUSEに足を運ぶ機会となった。これら一連のプロセスと本事業の意義を伝える機会として、3月には完成品発表会を行った。各企業から次の事業展開を見据えた意見があがるなど、将来的なイノベーションの兆しを感じられる事業となった。

●担当コーディネーターによる振り返り

一般的なビジネスにおいては、明確な目的と最終的なイメージ、そこに向かう最短のプロセスが求められる。その中で、今回の「面白いことをやろう」という、いわば感覚的な呼びかけには、戸惑いを感じた参加者も少なくなかったはずだ。普段のビジネスとは一旦距離を置き、口実としての共同創作に取り組む。そこではじまる雑談から、思いもよらないアイデアが生まれるかもしれないという不確実性に価値を見出したのがこのプログラムなのだ。什器づくりをリードしたクリエイティブチーム「デッドストック工務店」は、「ゴミも磨けば光る」を合言葉に、産業廃棄物やありもので空間をつくる建築ユニットだ。彼らは、廃材の中にある造形美や、素材そのものが持つ輝きを見出して、それらが生まれ変わるイメージを描く。見方を変えるだけで、それまでなかった新しい価値が宿る。その価値転換もまた、このプログラムの面白さだ。制作した什器は、FUSEのカフェスペースに設置され、FUSEの多様な人の関わりを可視化する。今後、この出会いの中からさらに先を行くイノベーションが生まれていくことを期待したい。(立石沙織)

社会福祉法人ひかりの園(浜松市根洗学園)(浜松市) 「福祉」と「アート」の豊かな 関係をシェアするための対話

●実施期間 | 2021年6月～2022年3月
●実施場所 | 浜松市根洗学園

map 20



時間に解説が入っており、わかりやすい構成となっている(動画「アフレコ根洗」／浜松市根洗市学園のYouTubeチャンネルで公開)

●団体概要

発達がゆっくりとした乳幼児に対して、個々が持つ力を引き出し、成長をサポートする療育を行う施設。福祉×アートの実践を通して、施設職員の創造性を高め、家族との関わりの活性化をはかる。

小松つながり醸造所(浜松市) 人をつなげる地域をつなげる 醸造プロジェクト

●実施日 | ①[森のねんどワークショップ] 2021年11/28 ②[小松のまち展示&ワークショップ] 2022年2/11、12、13
●実施場所 | ①明治屋醤油店舗内 ②浜松市鴨江アートセンター

map 19



人形作家・岡本道康さんにより、100年前の小松地区の街並みを再現するワークショップが開催された

●団体概要

浜松市北部、小松地区を中心に文化・歴史・アートの発信を行い、地域の人と人をつなぎ「心の拠り所」となる交流の場をつくることをめざし、2021年に発足。

●プログラム概要

社会福祉法人ひかりの園は、高齢者、障害者、児童への福祉事業を展開する事業者だが、その中の療育施設である浜松市根洗学園では過去10年以上に渡ってアートプロジェクトに取り組んできた。様々な実践プログラムの他、その積み重ねから得た福祉とアートの相性のよさの価値を地域の福祉関係者とシェアするための取り組みも展開している。

今年度は療育施設の職員のまなざしを可視化する映像制作と、福祉施設でアートプロジェクトを始めようとする人たちにに向けたハンドブックの制作に取り組んだ。

子どもたちに寄り添う現場職員のまなざしという普段は目に見えず、評価されにくい点に目を向け、職員それぞれが現場で短い映像を撮り、そこに映る子どもたちの姿に想像でセリフをあてた。それらを台本に仕立て、俳優が演じる映像作品を作成した。

ハンドブックは、実践のためのQ&Aがテーマ毎に立てられたパートと、アーティストがどのような考えを持って福祉施設での取組に関わっているのかを探るインタビューや対談によって構成されている。

●担当ディレクターによる振り返り

ひかりの園がこれまで進めてきた浜松市根洗学園での取組は当事者である子どもたちではなく、子育てに関わる親や職員を対象とした事業が多い点が特徴だ。しかし親も職員も大変に忙しく、大掛かりなことは難しい。それでも、隙間を縫って参加できる枠をつくったり、様々な試行を繰り返してきた。それがよく表れている取組が、今年度も実施した映像制作である。

演劇家の柏木陽さんは職員見習いのようにエプロンを着け、現場のリサーチを行い動画を完成させた。その主役は、子どもの振る舞いにまなざしを向けた職員一人ひとりだった。職員が撮りためた映像を、演劇家がそっくりそのまま台本に仕立てたことにより、そのまなざしが際立った。

当初、俳優が演じるというのはプライバシーへ配慮する策だったが、その結果、撮影において職員が現場の知見を元に演技指導するという役割が生まれ、それは職員にとって自らの仕事を違った目で振り返る機会になったようだ。日頃は全く接点のない両者が、お互いの専門性を尊重し合い、言葉を介してノウハウを交換するような、協働でものをつくる醍醐味が感じられる場面だった。(鈴木一郎太)

●プログラム概要

浜松市浜北区小松地区にある明治8年創業の醤油蔵「明治屋醤油」という歴史ある建築資源を地域に開いていくことで、醤油蔵が地域の人たちにとって「心の拠り所」になることを目指す活動を展開した。

当初は食育ワークショップなどの開催も予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、あえなく中止。人形作家の岡本道康さんによる古い小松地区の街並みを再現するワークショップを開催し、後日、岡本さんの手により完成した「街並み」は、鴨江アートセンターで披露された。

また、明治屋醤油は創業から幾度かの火災に遭い、貴重な資料も焼失していることに加え、これまでの歴史を知る人も少なくなっていることから、クラウドファンディングを通じて支援を募り、丁寧な聞き取り調査や取材を経て、明治屋醤油の歴史や現状を伝える書籍を制作した。

●担当ディレクターによる振り返り

明治屋醤油を舞台に開催された岡本道康さんのワーク

ショップには、地域住民をはじめ総勢20名近くの参加者が集まり、小松地区の1丁目から12丁目までを、当時の写真や資料などをもとに粘土で再現していった。明治屋醤油の近隣に暮らす子どもは、まさに自身が通う小学校のルーツとなる100年前の小学校を熱心につくっていた。

この企画が優れている点は、空想ではなく、手を動かして実際に存在していた街を制作していたことにある。「油屋があるってことは、当時は電気が通っていなかったんですね」「ほら、芝居小屋まであるよ」と参加者の手により、次々と当時の建物が創作されていったが、全てのパーツがはめ込まれ、街の全貌が姿を現したとき、思わず歓声が上がった。きっと参加した人には、建物だけでなく当時の人々の暮らしの姿がそこに見えていたことだろう。

ジオラマのような明治40年代の小松の街を俯瞰で眺めていると、特徴的な黒壁の建物や天高く伸びる煙突など、改めてこの明治屋醤油という醤油蔵が地域のシンボリックな存在だったことがよく分かる。参加者は、手のひらサイズの家々を指先を使って制作していくことにより、ひとりひとりが暮らす「自分の街」に思いを巡らせることができたのではないだろうか。(櫛野展正)

文化芸術による地域振興プログラム | 地域はじまり支援

アートプロジェクトの実施に向けた試行的な取組を支援。
高校生から80代まで職業もさまざまな担い手たちが、
自ら未来を創るべく立ち上げた5つのプログラムが各地で芽吹きを見せた。

プログラム名称	団体名	所在地
young熱海アートプロジェクト「巡る」	young熱海	熱海市
しずおかのひみつ交換所	シズオカオーケストラ	静岡市
港まち文化プログラムVol 2. ～焼津ノスタルジア～	焼市 YAI-CHI	焼津市
川根本町お茶染め文化創出プロジェクト	川根本町お茶染め実行委員会	榛原郡川根本町
クラシック専用webサイト ―音楽の森に人は集う―	MUSIC&ART Support	掛川市

静岡県東部→中部→西部の順に掲載

young熱海(熱海市) young 熱海アートプロジェクト 「巡る」

●団体概要
創造的活動に関心のある若者のコミュニティを熱海につくることを目指し、2021年に発足。20代のスタッフが中心となり、アートイベントの企画・実施を通して熱海の魅力を発信する。

●実施日 | 2021年10/2～10/4
●実施場所 | Article Atelier & Gallery

map 05



young 熱海アートプロジェクト開催風景

●プログラム概要

高齢化や空き家の増加などの課題を抱える熱海では、近年まちづくりやアートなどの新しい活動や場が生まれている。young熱海では、こうした地域の過去から現在を見つめ直し、熱海に若者のアートコミュニティをつくることを目指して、その第一歩となるアートイベントを企画した。循環を想起させる「巡る」をテーマとし、アートのスペースへ生まれ変わった施設を会場に、計3日間開催した。はじめの2日間は現代アーティストのさとうなつみ氏による熱海の自生植物を使った作品展示を通して、植物の生と死を想起させるようなインスタレーションを展開。2日目には、その空間で舞踏家のカナキティ氏によるパフォーマンスを行った。カナキティ氏は、さとう氏が制作した「殻」を破り、芽吹いていく植物とそこをめぐる水脈を表現した。最終日となる3日目は、熱海で活動する地元アーティストによる作品展を開催し、地域内外から集まった若者の視点が照らし出されるイベントとなった。そしてイベント閉幕後も、ネットラジオでの自主的な情報発信やSNSを活用した仲間づくりをとおして、継続的なコミュニティ活動に取り組んでいる。

●担当コーディネーターによる振り返り

本事業の最大の特徴は、熱海で生まれ育ち、一定の距離感で地域を見つめてきた若者によって始まったアクションであるということだ。これまで地域に対し受動的な関わりをしてきた彼らが、地域を自分事としてとらえ直し、自ら憧れていたアーティストを招いたアートイベントを開催する。それは一見、個人的な活動にも思えるが、過疎化などの複雑な社会課題を抱える現代において、地域を自分事化する若者が増えるということは、地域にとっても公益的な効果をもたらす可能性をもっている。
特に今回、アートを媒介に地域内外が交わる機会をつくりだしたことによって、結果的に老若男女、国籍も多様な人々が関心を寄せ、足を運び、様々な声をかけてくれたという。自分たちのアクションが、地域を形作る1つのピースになりうると、直接肌で実感すること。それこそ最も重要な成果であり、そこで目覚めたyoungな彼らはまさに我々アーツカウンシルしずおかが提唱する「住民プロデューサー」なのである。
(立石沙織)

シズオカオーケストラ(静岡市) しずおかのひみつ交換所

●実施日 | ①2021年/5/2～5/5 ②12/18～12/19 ③2022年3/5～3/6(展示イベント「しずおかのひみつ展」会期中)
●実施場所 | ①「ふじのくに ⇄ せかい演劇祭2021」会場周辺 ②ハニカムスクエア呉服町 ③泊まれる純喫茶ヒトヤ堂 map 09



駿府城公園や呉服町など静岡市内各所に特製屋台が出現し、「ひみつ」の交換が繰り広げられた

●団体概要
人々がまちを音楽のように味わいながら、「静岡のおもしろさ」を再発見できるよう、人とまち、人と人のあいだに、あたたかな関係性や新しい視点を生み出す場づくりを行っている。

焼市YAI-CHI(焼津市) 港まち文化プログラムVol.2 ～焼津ノスタルジア～

●実施期間 | 2021年6月～2022年3月
●実施場所 | 焼津市 map 10



市民から提供された古写真と今の焼津港

●団体概要
港町・焼津市の歴史を振り返り、地域の伝統や文化を新しい時代に合った形で発展させ、後世に伝える事業を展開している。

●プログラム概要

道行く人たちから「ひみつにしておきたいほど大切な静岡の情報」を聞き出し、ひみつを提供した人は別の誰かのひみつを得ることができるというプロジェクト「しずおかのひみつ交換所」を静岡市内で複数回にわたって開催した。特製の屋台を引いて市街地を練り歩き、街中に常設ではない象徴的な場をつくり出したことで、多くの参加者はガイドブックには載っていない誰かのお気に入りの場所などを知る機会となり、静岡の街に愛着を抱くことに繋がったようだ。

●担当ディレクターによる振り返り

特徴的なのは、スタッフが仲介役となって、ひみつを聞き出していたことだ。2回目の試行時からは、スタッフと会話した内容が記録され、参加者はひみつと共に会話の内容を持ち帰ることができた。そして、どの人にどんなひみつが届くかは、まるで薬を処方するかのように、スタッフが選定していたため、ときには参加者の趣味嗜好に近い情報が提供

されるなど、偶然の出会いを楽しむことができる仕掛けになっていた。

また、今回の企画を実証実験と捉え、終了後のミーティングを経て、その都度、企画のバージョンアップが行われた。例えば1回目のときには、ひみつを収納する道具として薬瓶が使用されたが、2回目には使われたのはタミヤの小さなガラス製ボトルだった。さらに、「ひみつ」を受け渡す道具として茶の鑑定に使用される拝見盆が使用されるなど、静岡に関連した品々を別の用途で提示することより、「将来的には静岡独自の土産物を販売したい」という団体の意図を汲み取ることができた。

インターネット文化の普及により、生活は便利になった一方で、そこから流れてくる情報は現在地や過去の検索履歴、SNSでの閲覧履歴などに基づいて、各個人に特化した情報だけが提供されている。つまり無関心なことや自分と違う意見は見えづらくなっている現状がある。そう考えたときに、インターネットでは決して入手することのできない情報を提供する本事業は、コロナ禍で疎遠になってしまった人と人の温もりを思い起こさせるという、まさに現代に適した企画と言えるのかも知れない。(柳野展正)

●プログラム概要

本事業の主な取組は写真集の制作である。テーマを「焼津ノスタルジア～過去・現在・未来～」とし、古写真と現在の写真をビフォア/アフターで配置し、見た人がそれぞれの感覚で未来を創造・想像できる仕掛けとした。最後のページは個々に好きな画像を貼ってもらうスペースとし、あえて白紙とすることで、それぞれの想いを込めた写真集となることを意図した。

古写真は市民からの提供されたものを中心とし、写真にまつわる様々なエピソードを通して、読む人が「焼津に対する想いを再確認する」や「当時の暮らしや文化について学ぶ」機会となるよう工夫した。プロモーション動画の制作や市内施設での展示のほか、ウェブ上では、旧焼津港築港のきっかけとなった持塚彌吉氏のエピソードなども発信した。小さな港町であった焼津が、築港から現在の国際海洋都市へと成長した経緯を紹介することで、新たな時代に合った築港(=新たな文化の創造)が生まれることを期待している。

●担当コーディネーターによる振り返り

焼市YAI-CHIは焼津をこよなく愛する2人が、魚河岸シャツ協同組合で出会い、意気投合して活動を始めた団体である。当初は「魚河岸シャツ」を中心にイベントや動画などを制作していたが、コロナ禍のネガティブなニュースが続く中、改めて焼津の歴史・文化を丁寧に紐解き、将来につなげていきたい意識を強く持った。本事業は、単なる写真集の制作にとどまらず、地域住民を巻き込み、彼らの記憶を掘り起こしながら、古写真に写る同じ場所の現在の姿を、焼津出身の若いプロのカメラマンに託して切り取る。そして最後には読者に将来のその場所の姿を想像する余白をつくることで自由に未来を創造してゆくきっかけを作っている。

この事業の成果は、働き盛りの2人がちょうど街を俯瞰できる年代と立ち位置に差し掛かり、次世代への継承を意識しながら、地域の人たちを信じて、街の未来を問いかけようとしているところである。こうした想いを地域の人たちがどう受け止めるか？写真集へのフィードバックを待ちたい。(佐野直哉)

川根本町お茶染め実行委員会(榛原郡川根本町)
川根本町お茶染め文化
創出プロジェクト

●実施日 | ①お茶染めワークショップ、ロゴデザインおよび商品開発についてのディスカッション 2021年5月～9月 ②展示会 2022年1/13～1/21
●実施場所 | ①中川根第一小、中川根南部小、中川根中、川根高等学校ほか ②フォーレなかかわね茶茗館 map 12



フォーレなかかわね茶茗館にて開催された成果報告展示では、95点のロゴ案が展示された

●団体概要
地域資源である茶葉の活用方法として「お茶染め」を提案、住民の意識改革を促し、地域に新たな文化を創出することを目指して令和3年に発足。茶業および地域活性につながる事業を展開する。

MUSIC&ART Support(掛川市)
クラシック専用webサイト
ー音楽の森に人は集うー

●実施期間 | 2021年7月～2022年3月 ※ウェブサイト公開日2022年1/27
●実施場所 | 掛川市および静岡県内外 map 18



Z世代の2人がナビゲーターとしてクラシック音楽の魅力を伝える ●URL | <https://otomori2022.com/>

●プログラム概要

川根本町お茶染め実行委員会は、お茶を染料にした染物の存在を町内に周知し、関心を持つ人や担い手発掘につなげる機運醸成を目的とした活動を展開した。活動のはじまりである今年は町内の教育機関と連携した活動に主眼を置き、生徒たちと協働してブランド立ち上げを行った。川根本町内の小中学校とロゴマークの制作、川根高校と商品開発に取り組んだこの活動は、生徒と町をつなぐ媒介として機能した。

●担当ディレクターによる振り返り

製茶段階で出る商品にならない茶葉を染料として活用するお茶染めは、県の伝統工芸に指定されている駿河和染の職人である鷲巣恭一郎さんが手がけるものだ。その技術を茶産地である川根本町で産業として結実させたいというのが主催団体代表の西條和子さんの思いだ。そのためには仲間が必要であり、産声を上げたばかりのこの取組をまずは町内に知らせる必要がある。将来の担い手

候補として、また町が関心を向ける先として、学校を初年度のパートナーに選択した。そこには、お茶染めを媒介に各々の学びにつなげられるよう学校との調整があった。そのように連携先にメリットが派生するように考えられていることがこの事業の特色だ。

町内の全6小中学校が関わったロゴ制作においては、4つの小中学校の代表者が「小中学生お茶染め実行委員会」を立ち上げ、ロゴ案の募集方法を考えたり、各校への呼びかけ等を担ったりした。最終的に95点のロゴ案が集まり、話し合いを通じて選出した案をブラッシュアップのためにデザイナーに渡した。また川根高校には地生学という独自の科目があり、その授業の中でお茶染め体験をするなどし、5名の生徒たちがその都度気付きを得ながら取組が進められた。学校としては、今後、高校と町が協働する足掛かりになったという手応えを感じたようだ。

こうした取組の結果、まだ試作段階ではあるものの、お茶染め製品が川根本町のふるさと納税の返礼品として登録された。今後、団体が拠点としている千頭駅隣りのカフェグラマに染色工房を立ち上げる予定もあり、関心を寄せてくれた有志と体制を整えた展開が楽しみだ。(鈴木一郎太)

●プログラム概要

コロナ禍の2年間によるダメージは演奏家だけでなく、演奏会に携わるすべての人たちに及んだ。そのことにより、演奏家が聴衆に音楽を届けるまでにどれだけの人が携わり、またその人たちの繋がりがあって初めて演奏会ができるということが浮き彫りになった。MUSIC&ART Supportではこれまで延べ100回以上のコンサートをしてきたが、コンサートの後に演奏家を囲んで“打ち上げ”をしているときの、聴衆を含めた演奏会に関わる皆さんから出てくるクラシック音楽への熱い想いや感想が、コンサート制作の原動力であった。立場を超えたそれぞれの人のクラシックへの想い、それが交差することでクラシックの演奏会に関わる「能動的な面白さ」がより体感として理解できると考え、そんな想いが交差する“打ち上げ”のような場をウェブ上で始めた。

インタビューではどんな人でも敷居を感じないで演奏会に行けるように、特にクラシック音楽の「聴き方」についてお話頂き、ポッドキャストではコンサート後のアフタートークのような活気や一期一会な出会いを感じられ

るような双方向メディアとして配信を行っている。

●担当コーディネーターによる振り返り

本事業は女子高生が自らアイディアを考え、提案し、1年間担当PCが伴走しながら一から立ち上げたものだ。途中より大学生の姉も加わり、マーケティングリサーチやSNSのデータ分析、消費者行動、経験価値、ウェブデザインなど、マーケティング的なアプローチを中心に、鑑賞者の能動性をどう引き出すか、などを検討した結果、立ち上げる事業のUSP(ユニークセリングポイント)としてたどり着いたのが「演奏会後の打ち上げ」であった。こうした演奏家・聴衆・関わる人がフラットな関係を築ける場合は、これまでごくプライベートなもので、一般の鑑賞者には開かれたものではなかった。それがオンラインで開かれ、逆行して実際の演奏会へつながっていく可能性を示したこと、そして若い世代が自分の感性を信じて、好きなようにクラシック音楽の支援に力を注げるプラットフォームを世に出したことがこの事業の成果であろう。(佐野直哉)

文化芸術による地域振興プログラム
[成果報告会]

実施日 / 2022年3月11日(金)
実施会場 / グランシップ10階会議室
実施内容 /
「報告会」は、アーツカウンシルしずおかの支援のもと、県内各地で実施されたアートプロジェクトについて活動報告を行うものである。

- 1. 活動報告
- 2. ディスカッション
- 3. ディスカッションでの気づきを発表

おおよそは、上記の3つの区分で「報告会」を行った。

ゲストコメンテーター:

斉藤雄大(特定非営利活動法人ESUNE理事・事務局長)

高橋晃一郎(特定非営利活動法人音楽の架け橋メセナ静岡事務局)

中村俊哉(株式会社シングウ技研専務取締役、アフリカンフェスタin沼津実行委員会)



1. 活動報告

スクリーンに画像を1枚映しだし、スクリーン前で約3分間、自由なスタイルで活動報告を行った。威勢の良い音調に高揚し、「語り」のような穏やかな声色に眠気を誘われ、気になるキーワードを耳にして注意を傾ける人など、発表を聞く人たちもそれぞれに、また度々と変化していた。
「わたしは80歳です」
会場の集中力が一気に高まった瞬間だった。
とある発表者が、人前で話す緊張ゆえ言葉をうまく手繰ることができずにいる時、その緊張感が会場中に伝播した瞬間。
会場には見守る空気が漂った。



2. ディスカッション

3名のプログラム・ディレクターがそれぞれ担当する3つのグループに分かれて、グループディスカッションを行った。グループは西部・中部・東部/伊豆のエリアで分けた。
北本の担当する東部/伊豆グループでは、
●活動を行う上での課題や解決できた方法
●相談したいこと
●面白い人や物事などのエピソード etc…
などから選りすぐりの「伝えたいこと」を1つ選び、グループ内で共有した。共有後は好き好きに「伝えたいこと」について話し合い、そこから導き出した「気づき」を発表した。
「活動についてもっと知ってもらいたい」「運営メンバーが離れていった」「言葉がなくてもだいたいわかる」「空っぽから出発する!うまくいなくてもいい」などの「伝えたいこと」を共有した。



3. ディスカッションでの気づきを発表

3グループそれぞれの代表が気づきを発表し、次にゲストコメンテーターのコメントを発表。
●活動を周知するには
●支援者を増やすには
●理解や共感を得るには
上記をテーマとした内容が示された。



発表を経て、耳にした印象的な言葉は「孤独」。
地域で行われる事業は、一見賑やかで華々しく、周囲からも注目されているように思える。しかしながら、その中心にいる人たちは「孤独」であると言う。その「孤独」とは、一体どのようなものなのだろうか。「孤独」の対義語を辞書で調べると、「集団、群衆、賑やか、」といった言葉が並べられる。事業で行うイベント性の高いものの状態と、それを運営し支える人の状態とが対極にあるという訳だ。
「文化芸術による地域振興プログラム」を敢えてひとことで言い表せば、先駆的で、地域資源や課題に創造的に対応し、文化芸術と文化芸術以外の分野と協働した事業である。それを企画しリードしていくのが、住民プロデューサーだ。
まずは誰かに知って欲しいこと、伝えたいことを、そして、ゆくゆくは一緒に考えてみたいことを、地域で創造的に表現する方法の一つが、アートプロジェクトである。けれどもその知って欲しいことや一緒に考えてみたいことは、これまでの社会では見過ごされてきたことや、あるいは気づくこともなかったものごとだったりする。アーティストがそのものごとに、時に高い関心を示し行動する人なのだとすれば、住民プロデューサーや住民プロデューサーとともに働く人たちも同様だ。先の「孤独」との関係でいえば、集団や群衆という人々の集まりに存在する関心事と、この報告会に集まる人々との関心事が違うのだらうと推察するし、だから先駆的で創造的だとも言える。
発表に使用された画像の2/3は、集合写真のように住民プロデューサーとともに働く人たちの姿が映し出されていた。ここに集う人たちの2/3が「人」を見ている。活動発表での注視や見守る雰囲気も、「人」に対する行為である。アートプロジェクトが見ているのは「人」なのではないだろうか。目の前に存在する「人」、あるいはまだ出会ってない「人」。そのような「他者への眼差し」を、確認することができた。
「他者への眼差し」を持つ人が「孤独」である、というぐはぐな状態を、どこかで経験している「人」がいると想えるのが、ネットワークの良さではないだろうか。
報告会の1ヶ月前「報告会をアートプロジェクトに」という話を受けた。実はすでに報告会の内容は想定していたが、それはアートプロジェクトではなかった。なので、その急な話もありがたく受け止めることにして、せっせと「アートプロジェクト化計画」を思索した。「会議」において、見過ごされてきたこと、気づくこともなかったものごととは何か。「伝える」を「伝わる」に変えるにはどうしたらよいか。住民プロデューサーの持ち味や主体性を活かし、互いに知り合うとはどういうことか。ここでの気づきを、今後に生かしたい。(北本麻理)

文化芸術による地域振興プログラム 〔評価制度の運用〕

静岡県文化プログラム推進委員会による「静岡県文化プログラム 地域密着プログラムを対象とした試行的評価」(以下、「文化プログラム評価」という。)を継承し、「文化芸術による地域振興プログラム」(以下、「地域振興プログラム」という。)についての伴走評価を行った。

1. 目的

各プログラムの目的や価値を多くの人々と共有するためのコミュニケーション手段として、また、プログラム内容をより良いものとしていくための手段として、評価制度を活用する。

2. 実施内容

- 実施団体が自らのプログラムを客観視し、価値の見極めや見直しを図る機会とするため、「簡易評価アセスメントシート」を用いた事前評価と事後評価を実施
- 文化プログラム評価を踏まえた、地域振興プログラムの評価目的の整理とセオリーオブチェンジの検討
- 実施団体のみならず、プログラムに関わった人達が見出している事業の価値を明らかにするため、3つのプログラムを対象に、詳細な事業効果の検証・評価を行った。(一般財団法人CSOネットワークに委託)

テーマ（団体名）	詳細評価の概要
熱海怪獣映画祭 (一般社団法人熱海怪獣映画祭)	本映画祭は、過去に複数の怪獣映画のロケ地になってきた熱海市の地域性を背景に、様々な立場の人が「怪獣映画が好き」という気持ちを素直に表現できる場・機会としてコミュニティ形成を進めている。未来のクリエイターの活動を支援し「クリエイターが集まる街・熱海」といった新たな価値を生み出したり、地域の担い手・関係人口の増加など熱海地域の発展に寄与することが示唆された。
福祉 × アート (社会福祉法人ひかりの園)	法人が運営する根洗学園（療育施設）では、音楽家や演劇家などを招いて、学園の子どもや保護者、職員を対象としたさまざまなアート活動を行っている。こうしたアート活動の場は、活動に参加した保護者の子どもに対する気づきの獲得や不安な気持ち等の軽減、さらに子どもとの関わり方や関係性の変化、子育て環境改善等へ貢献していることが確認できた。
原泉アートプロジェクト (原泉アートプロジェクト)	本事業に参加した多くのアーティストからは原泉地区で滞在制作中、作家人生において大きな転機となるような変化を遂げたとの報告があり、また地域では稼働していない地域資源の有効活用が進んだり、地域住民もアート活動の存在が日常（当たり前）として受け入れられるような状態になる等の変化が確認できた。

※評価報告書全文はアーツカウンシルしずおかホームページより閲覧可能

全国アートNPOフォーラム in 熱海

特定非営利活動法人アートNPOリンク主催の「全国アートNPOフォーラム in 熱海」に協力し、アーツカウンシルしずおかの取組について報告した。また、県内4団体がアートプロジェクトの紹介を行い、全国各地の団体との交流を図った。

- 実施日 | 2022年2月26日(土)
- 実施会場 | 来宮神社 参集殿(熱海市) ※オンライン配信あり

- 全国各地のアートプロジェクト(10団体程度) 活動発表
- アーツカウンシルしずおか 事例発表
- 静岡県内のアートプロジェクト(4団体) 活動発表
 - 熱海未来音楽祭
 - しゃぎりフェスティバル実行委員会
 - 特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ
 - 浜松いわた信用金庫FUSE



主催／特定非営利活動法人アートNPOリンク 協力／アーツカウンシルしずおか 企画・運営／アート・アンド・ネットワーク

2021 アーツカウンシルしずおか アニュアルレポート

ARTS COUNCIL SHIZUOKA ANNUAL REPORT 2021

〔主催事業〕

- マイクロ・アート・ワーケーション
- 文化芸術による地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業
- 先進事例視察を通じたネットワークづくり
- 超老芸術
- オンラインセミナー「お点前ちょうだいいたします」
- オンライン寄合「へそちゃ会」

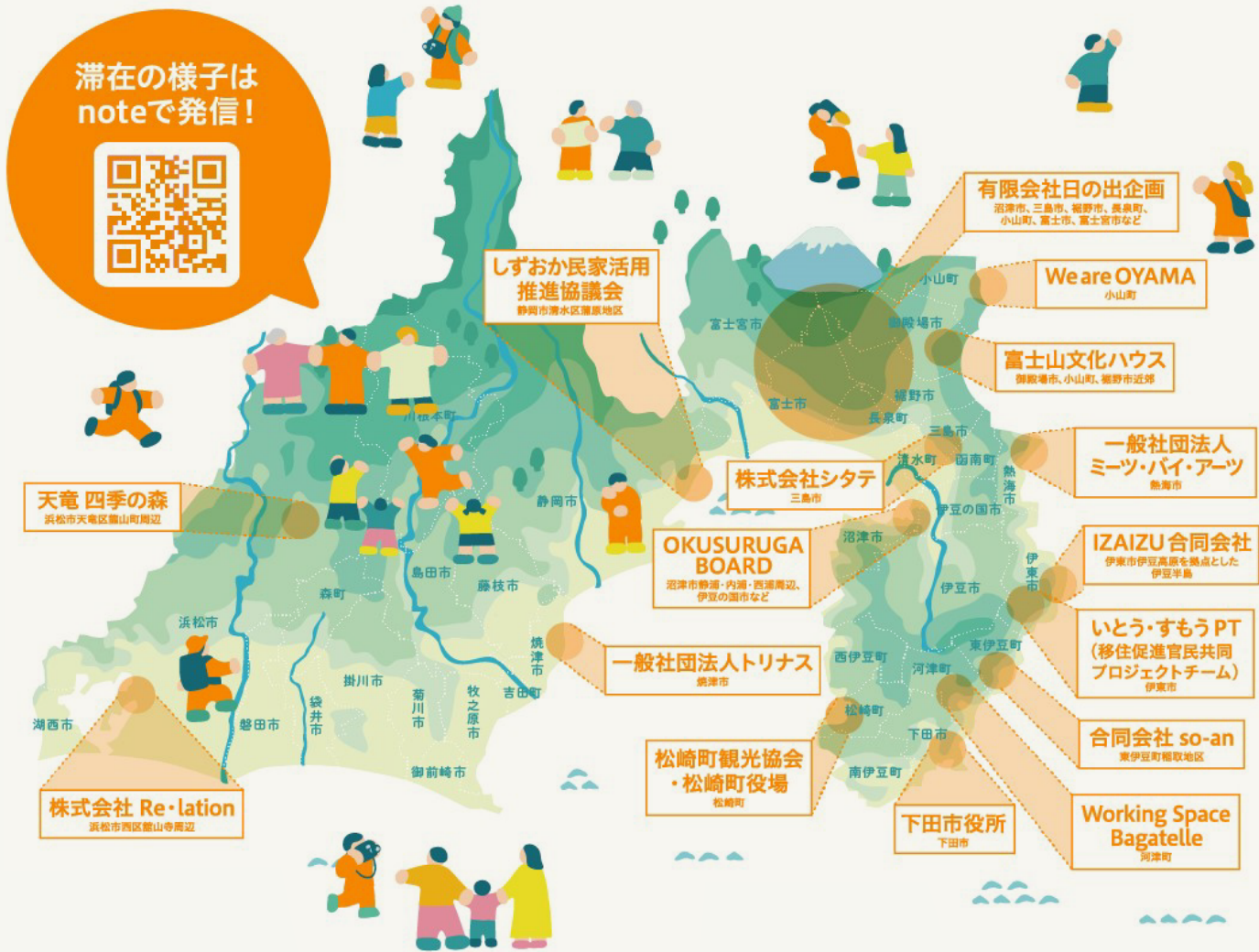
マイクロ・アート・ワーケーション(MAW)

●実施日

| 2021年11/1～2022年3/30

●実施場所

| 県内16地域



ホスト(地域)

※県東部→中部→西部の順

- 下田市役所(下田市)
- 松崎町観光協会・松崎町役場(松崎町)
- Working Space Bagatelle(河津町)
- 合同会社so-an(東伊豆町稲取地区)
- いとう・すもうPT(移住促進官民共同プロジェクトチーム)(伊東市)
- IZAIKU 合同会社(伊東市伊豆高原を拠点とした伊豆半島)
- OKURUGURA BOARD(沼津市静浦・内浦・西浦周辺、伊豆の国市など)
- 一般社団法人ミーツ・バイ・アーツ(熱海市)
- 株式会社シタテ(三島市)
- 富士山文化ハウス(御殿場市、小山町、裾野市近郊)
- We are OYAMA(小山町)
- 有限会社日の出企画(沼津市、三島市、裾野市、長泉町、小山町、富士市、富士宮市など)
- しずおか民家活用推進協議会(静岡市清水区蒲原地区)
- 一般社団法人トリナス(焼津市)
- 天竜 四季の森(浜松市天竜区龍山町周辺)
- 株式会社Re・lation(浜松市西区館山寺周辺)

旅人(アーティスト)

※五十音順

- 青木拓磨、秋野深、asamicro、Ash、あまる、市川まや、今井尋也、Aki Iwaya、上原善広、内田涼、大川原脩平、おきなお子、荻野NAO之、奥野晃士、越智良江、カトウマキ、北野藍子、北林みなみ、癸生川栄、旭堂南湖、Wakana Kimura、黒田菜月、小池壮太、コレクティブ・アーバン・ポイント、佐藤美代、佐藤悠、鮫島弓起雄、澤隆志、澤田守秀(SAWADA : snare drum solo)、設楽陸、渋谷薫、清水玲、白井真優、新造真人、鈴木雄大、関根愛、高嶋敏展、タカハシ'タカカーン'セイジ、タノタイガ、千葉尋、露木春那、戸塚愛美、豊永純子、中村るつ、成清北斗、長谷部勇人、蜂谷充志、林田真季、原口みなみ、藤原佳奈、冬木遼太郎、細洲太麻紀、堀園実、ほんだゆかり、本間純、松本真結子、三浦雨林、水野渚、持塚三樹、山中カメラ、山本晶大、吉崎裕哉、Eri Liao、綿貫大介

●事業のねらい

マイクロ・アート・ワーケーション(MAW)は、静岡県内各地で活動する団体が「ホスト」になり、アーティスト等を「旅人」として一週間程度受け入れ、地域住民とアーティストが出会うきっかけをつくる事業である。昨今、地域芸術祭等の台頭により、都心部以外の中山間地等においても、アートやアーティストの活躍が期待されている。本事業では、地域とアートが協働する手前にまず互いを知る機会を設け、将来的にホストや地域住民が主体となり、当該地域の可能性を耕す新しいアートプロジェクトが生まれることを目指している。

●実施内容

ホスト、旅人ともに公募をし、両者のマッチングを行った結果、県内全域で16団体のホストと、14都府県から64名の旅人の参加が決定した。アーツカウンシル主催のオリエンテーションをホストごとに実施したのち、2021年11月から翌年3月の間でホストと旅人が直接日程調整を行い、3泊4日～6泊7日でホストの活動エリアに旅人が滞在した。一部で、年明けから再拡大した感染症の影響により、滞在の延期や参加辞退を余儀なくされ、予定通りの実施が困難な状況も生じたが、最終的には61名の旅人の滞在が実現した。

旅人の気づき ～ホストや地域との出会いをとおして～



現役の左官職人、中村一夫氏を訪ねたようす(中村左官鑑絵倉庫にて)

依田家ははじめ武田の重臣だった者たちがこの地に逃れ住みついたことが、今の松崎町のなまこ壁の景観とも繋がっている。彼らは財源を十分にもっており、全国でも早い時期に養蚕を始め、松崎シルクが誕生した。

なまこ壁の景観を切り口に、色々な方の話を聞くと観光目線だけでは気づけなかった松崎町のポテンシャルの高さを垣間見ることができた。この町には、誇り高い歴史があり、暮らしの中で住民同士の信頼と程よい繋がりを感じた。

私は彫刻家として美術に携わっているが、作品(カタチ)にしていこうためには自分にある美術以外の部分をしっかり耕していくことをしなければいけないと思っている。美術畑では美術は育たなくて、他の栄養が必要だ。何に興味があるのか、何にときめくのか。いくら情報を仕入れても、手を広げた範囲の出来事に勝るものはない。(堀 園実)

*本記事は、マイクロ・アート・ワーケーションのnoteに掲載された*堀 園実「また会いましょう」*より抜粋し、執筆者承諾の上、アーツカウンシルが一部要約を行った。

●事業の成果 ①

本事業は、旅人に作品等の成果物は求めていない。なぜなら、表現活動が生活の一部であるアーティストにとって、日々の出会いやその先で得られる情報や経験はすべて大事な資源であると同時に、そこから何を生み出すかは予め想定するものではないからだ。時に彼らは、既存の概念に異なる視点を見出し、私たちが予期せぬ問いを投げかけ、新しい価値を提示することがある。第三者から見れば想定以上なことも期待外れなこともあるが、その「予期できなさ」こそ彼らの魅力であり、その姿に心動かされた人々の内側に化学反応を起こすこともある。だからこそ本事業ではあえて期待を込めすぎず、各自が自由に扱い得る「余白」を残すこととした。結果的に、旅人が滞在の様子を綴ったwebサイト「note」には、多種多様な旅人と地域の人々とのエピソードや土地の魅力、そこに触発された彼らの心の機微や思考の変化が、多彩な記録で残されている。(立石沙織)

マイクロ・アート・ワーケーション(MAW)

ホストの気づき ～「旅人」との出会い、地域との橋渡しをとおして～



龍山に住むおかあさんたち「ドラゴンママ」と、旅人の市川まや氏(右奥)(ドラゴンママのお店「よらんかね」にて)

「龍山に来て、満足していただけるだろうか」
最初に抱いた想いです。でもそれは杞憂でした。龍山は、限界集落なんかじゃない。まだまだ戦える。まだまだできることがある。今回、MAWIに取り組んで、本当に良かったです。アーティストのみなさんの日々のリアクションや毎日のnoteに、どれだけ勇気づけられたことか。
今回、(アーティストには)かたちとしての成果物は求めない、ということでした。非常にふわふわしたプロジェクト。一般の感性とはきっと違うみなさんが、こんな田舎にきて、しかもなにかつくるわけでもない、、、化学反応とは、その土地に来てくださったアーティストや向かい入れた地域の人々の中に起こるものでした。それは気持ちなのか、誇りなのか、意思なのか。言葉にすると稚拙に感じてしまいますが、今回のMAWでは、そこに気づくことができました。「龍山、すげえだろ！」と。(天竜四季の森/地域おこし協力隊からのコメント)

* 本記事は、マイクロ・アート・ワーケーションのnoteに掲載された「天竜四季の森」MAW振り返り - まだまだ戦える」より抜粋し、執筆者承諾の上、アーツカウンシルが一部要約を行った。

●事業の成果 ②

今回参加してくれたホストは、まちづくりや観光、移住促進など、活動目的も団体規模も様々であった。アートとは異なる他分野の人々が、アートやアーティストに何がしかの期待を寄せ、手を挙げてくれたことは、本事業の重要な成果である。ホストは期間中、旅人に対する地域案内や、彼らのリクエストに応じた地域情報の提供、地域住民と旅人の意見交換会のセッティング等、地域とアーティストの橋渡しとなる重要な役割を担った。ホストや地域住民がアーティストを知り、彼らが持つ独特な発想に触れる。アーティストもまた、地域づくりに取り組む人々の思いを知ること、地域社会の在り様を学ぶ。各地で実現された出会いの中には、立場の異なる人々が同じ地域を見つめながら交わした「対話」がある。この対話こそ、本事業最大の成果に他ならない。そこにはきっと地域の可能性を広げる種が蒔かれたはずである。(立石沙織)

■掲載実績(書籍)／松下慶太(著)『ワーケーション企画入門 選ばれる地域になるための受け入れノウハウ』(学芸出版社、2022)

文化芸術による 地域経済活性化モデル形成のための パイロット事業



●事業のねらい

アートプロジェクトによる地域経済の活性化を目指し、企業の力を住民の創造性を発揮する機会の創出や、社会的起業等に活かしてもらうためのモデル形成に向けたパイロット事業を実施した。

1. 事業の概要

①文化芸術の創造性を活かした地域課題への対応 ②地域コミュニティの活性化を担う人材の支援 ③地域住民との協働による地域経済の活性化の実現に向け行う、地域住民や社員との意見交換会やワークショップ等の開催と、これを通じた将来ビジョンの作成、自治体への提案等を行う企業と連携し、モデル形成に取り組む。

その過程にクリエイティブ人材(※)が加わることで、視点の変化や、課題への新たなアプローチが生まれることも期待する。
※本事業では、アーティスト、アートディレクター、アートマネジャー、キュレーター等を指す。

2. 実施期間：2022年1月～3月

3. 連携先企業：2021年12月に公募し、応募のあった5社の中から、4社を選定した。

法人名(所在地)	対象地域	事業内容
ACAO SPA & RESORT 株式会社(熱海市)	熱海市	ラウンドミーティングの開催により熱海市民の意見を集約したビジョンを作成し、芸術文化を通じて、同社が熱海の街に対してどのような働きかけができるかを提案
有限会社日の出企画(三島市)	沼津市、三島市、富士市、裾野市、長泉町、小山町	空き家を地域資源として、地域住民とアーティストがワークショップを実施。空き家の空間プロデュースや空き家を拠点とした商品開発研究の想定、ミニ芸術祭も実施
株式会社 CREA FARM(静岡市)	藤枝市	藤枝市仮宿地区のオリーブ園を舞台に農業、まちづくり、観光にまたがる事業の実施に当たり、既存の資源や物語をベースとして住民、企業、行政が一体となって展開できるビジョンを作成
有限会社春華堂(浜松市)	浜松市	浜松市中区神田町にオープンした本社複合施設「スイーツバンク」を拠点に、周辺の企業等が集まるコミュニティを生かした地域活性化プランを検討

先進事例視察を通じたネットワークづくり

●実施日 | 2022年 3/1(中部地域局管内)、3/3(西部地域局管内)、3/8(賀茂地域局管内)、3/10(東部地域局管内)
●実施場所(視察先) | UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川



●事業のねらい

まちづくりや観光、福祉、教育など様々な分野で活動している人々に、アートプロジェクトへの理解を深め、今後の活動に活かしてもらうことを目的に、県の各地域局の協力を得て先進事例の視察研修を実施した。

● 実施内容

地域局ごと4回に分けて【UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川】を視察。新型コロナウイルス感染症対策のため、対象を以下①②に絞って実施した。

- ① 行政関係者(まちづくり、産業、観光、移住、文化等の県・市町担当職員)
- ② 上記に係る関係者、関係団体構成員等

● 参加人数

	まちづくり	産業	観光	移住	文化	その他	計
行政	8	7	1	4	2	7	29
団体	3		1		2		6
住民		2		2			4
企業	1		1	1			3
計	12	9	3	7	4	7	42

【UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川】
主催：特定非営利活動法人クロスメディアしまだ (p14参照)
会場：大井川鐵道沿線地域
【代官町駅(島田市)～千頭駅(川根本町)】
※第25回ふるさとイベント大賞ふるさとキラリ賞受賞
※2022年注目の国際芸術祭ベスト6(ウェブ版『美術手帖』選定)

● 事業の成果

最初は作品にどう接したら良いか戸惑っていた参加者も、次第に自らの思い出を語り出したり、目の前にある事象に対し「これもアートでは？」と会話が弾んだりするなど、和やかな雰囲気の中で、お互いの活動を紹介し合うなどの交流が自然に図られた。また、主催者から「自分たちはアートの専門家ではないが、地域づくりの担い手としてアートを活用している」等の説明を受けると質問が飛び交い、「地域の中でキーとなる人の存在」の重要性への気づきや、自分たちの地域なら何ができるかを考える機会となった。

超老芸術



稲田泰樹さんによる「クライシスシリーズ」の絵画 [右上]土屋清孝さんのミカンの皮を素材にした作品 [右下]松下勤さんが作り上げたパラダイス

●事業のねらい

我が国では、世界に類を見ない早さで高齢化が進行しており、静岡県でも2025年には、県民の約3人に1人が65歳以上になり、また約5人に1人が75歳以上になると推計されている。こうした急速な超高齢化社会の到来により、医療・介護に掛かる負担の増大やそこに携わる従事者の不足が大きな課題となっている。本県では、高齢者がいつまでも元気に暮らしていけることが、高齢者の増加に伴い生ずる課題を解決する最も有効なアプローチとして注目されている。ただ長生きするのではなく、元気なまま歳を重ねることのできる期間を示す「健康寿命」が本県は全国トップクラスであり、この健康寿命のさらなる延伸を目指して、これまで様々な施策が実施されてきた。しかし、その大半は、豊かな食生活や温暖な気候、県民所得の高さなどからの分析がほとんどで、残念ながら創造的活動の面からの検討はなされていない。そこで、高齢になってからも独学でユニークな表現活動続ける人たち取材し、そうした人たちが生み出す表現を「超老芸術」と名付け、紹介した。

● 実施内容

以下の13名を発掘紹介した。

- 池谷 雅之 (1954年生まれ、浜松市在住)
- 岩崎 祐司 (1946年生まれ、焼津市在住)
- 渥美 圭亮 (1947年生まれ、2010年没)
- 稲田 泰樹 (1949年生まれ、富士市在住)
- 奥村 ユズル (1961年生まれ、静岡市在住)
- 黒田 清孝 (1946年生まれ、浜松市在住)
- きよゑ (1927年生まれ、沼津市在住)
- 杉村 聡 (1954年生まれ、島田市在住)
- セーラちゃん (生年非公開)
- 都甲 博文 (1955年生まれ、静岡市在住)
- 土屋 清孝 (1951年生まれ、湖西市在住)
- 野村 一雄 (1949年生まれ、静岡市在住)
- 松下 勤 (1954年生まれ、掛川市在住)

● 事業の成果

アーツカウンシルしずおかのWebサイトやウェブ版「美術手帖」で紹介だけでなく、以下のテレビ番組等でも放映されたことで、多くの問い合わせや情報提供をいただいた。

- たっぷり静岡
2021年11月19日(金) 18:10~19:00 [NHK総合・静岡県域放送]
- 静岡スペシャル「鬼才！“爆誕”驚きの超老芸術」
2021年11月19日(金) 19:30~19:56 [NHK総合・静岡県域放送]
- おはよう静岡
2021年12月6日(月) 7:45~8:00 [NHK総合・静岡県域放送]
- ニュースきん5じ
2022年3月4日(金) 16:50~18:00 [NHK総合]
- brut journal
2022年3月号掲載

個人の表現だけでなく、制作を始めた動機や高齢者の経験豊かな人生にも注目して紹介したことで、一見すると「芸術」とは言えないかも知れないが、身の回りの高齢者の中にも魅力ある表現者が存在していることを明らかにしたことで、人々の意識に変化をもたらした可能性がある。(櫛野展正)

オンラインセミナー お点前ちょうだいいたします



- 実施日 | 2021年10月～2022年2月（全5回）
- 実施場所 | 主にオンライン（各回の収録会場は「実施内容」参照）



●事業のねらい

将来の予測が困難な今、ビジネスの分野でもまちづくりにおいても、既成概念にとらわれない“アート思考”が注目を集めている。本事業は、県内で創造的な取り組みを主導し、地域の未来に向けて活躍されている方々をゲストに迎え、その発想の源や思い、活動の裏話などを「お点前」と称し伺ったオンラインでのセミナーである。プログラム・ディレクターおよびコーディネーターが、それぞれの専門性や興味を活かしながら、ゲストの所作からヒントをつかみ、視聴者の地域の活動に活かしていただくことをねらいとした。

●事業の成果

日本でも知られているアメリカ人アーティストのジェームス・タレルは、「アーティストとは、答えを示すのではなく、問いを発する人である」と語っている。また「今日のアートは、テクノロジーやデザインと結びつき社会的な課題に新たな提案を行う、あるいは、現代思想と結びつき、次の時代の社会の在り方を構想するといった思考実験の場所である。」（秋元雄史）とあるように、本事業で招いたゲストは、その活動分野において、当たり前とされている現状に「問い」を発して、新しい「在り方」を思考実験する実践者であると私たちは考えている。一見非常に伝統的な分野であっても、その歴史を丁寧にひもとき、自身の問題意識と視点から改めて見直していくと、同じ景色でも、新しい姿が立ち上がってくるのである。

その「問い」を発するという行為は、実は特殊なスキルではない。ちょっとした刺激と行動力、自分自身の興味、経験の蓄積と棚卸しのできることなのである。世代も関係ない。そうしたことを、少し先行く達人たちから引き出そうと試み、提示したことがこの事業の成果であろう。（佐野直哉）

●実施内容

収録(公開)日／収録会場	タイトル	ゲスト	聞き手
① 2021年11月25日 小高い研究所(沼津市)	『FP(ファイナンシャルプランナー)やアーティストがまちづくりに関わる ことについて』	・山田 知弘 (有)日の出企画代表取締役 ・戸井田 雄 Atelier&Hostelナギサウラ店主	鈴木 一郎太 プログラム・ディレクター
② 2021年12月4日 クラフト・ティー本店 (川根本町)	『日本茶を通してみつける 暮らしと営み』	・新谷 健司 (株)クラフト・ティー代表取締役、 (株)経営参謀代表取締役	北本 麻理 プログラム・ディレクター
③ 2021年12月	『ラッパの音を追いかけて ～身近な音楽文化の再考～』	・奥中 康人 静岡文化芸術大学教授	榎野 展正 チーフプログラム・ディレクター
④ 2022年1月21日 小國神社(周智郡森町)	『五感で継承する～「食」「音楽」 から感じる森町の舞楽～』	・一木 敏哉 懐石いっ本店主 ・古川 はるな フルーティスト・音楽博士	佐野 直哉 プログラム・コーディネーター
⑤ 2022年2月19日 藤枝市民会館(藤枝市)	『こども×アート×テクノロジー ～時代のつなぎ目で考える～』	・持塚 三樹 現代美術家 ・戸田 佑也 (株)あらまほし代表取締役	立石 沙織 プログラム・コーディネーター

各回のアーカイブをアーツカウンシルしずおかのYouTubeチャンネルで公開。なお、①②④⑤はライブ配信(視聴無料)を行い、③は公開収録とした。

オンライン寄合 へそちゃ会



- 実施日 | 2021年6/30、7/14、28、8/11、25、9/22、10/6、27、11/17、12/1、15、22、2022年1/12（全13回）
- 実施場所 | オンライン ●参加人数 | のべ150人



●事業のねらい

アートプロジェクトのきっかけにもつながり得る未だ顕在化していない社会課題やニーズを見出すことを目的に定期開催する対話のプラットフォーム。最近の関心事を投げかけたり、取組の紹介をとっかかりとして、参加者間での雑談をふくらませる。対話を広げながら、時折過去の話題を振り返り、社会や地域の状況・動向、人のあり方を見出し、まだ見えていない、とりこぼされている課題や期待を探る。

●内容と所感

毎回プログラム・ディレクター、コーディネーターが2名ずつ参加し、隔週ペースでzoomを介した寄合を開催。主婦や新社会人、医療関係者、文化関係者、企業人等が参加する中、時折県外からの参加もあった。場に投げかけてみたい話題を持つ参加者から話が始まり、それに対してそれぞれが反応するという形を基本とし、以下に挙げるようにその話題は多岐にわたった。

●カフェ ●アニメ ●子育て ●祭り ●要約筆記 ●高齢者とテクノロジー ●サードプレイス ●コピーバンド ●グリーンフェア

また、12回実施した議題を設けないフリーな寄合とは別に、「音楽団体の演奏会をひらくためには」というテーマを設定した回も開催。音楽団体の方々はもちろん、アートプロジェクトの実践者やダンサー等も加わり、活発に意見が交わされた。その中で、「分野が変われば『当たり前』に違いがある」という発言があり、「その違いを踏まえ、強みとできるような接続を促すコミュニケーション・デザインが大切だ」という意見がそれに続いた。さらには、「このことは音楽に限ったことではなく、地域や異分野との連携が盛んに行われる現在において、何をやるにしても大事な観点だろう」という発言もあった。

参加者それぞれが気になっていることを投げかけることには、持論を述べたり、主張に終始したりする危惧もあるが、「へそちゃ会」ではそうした発言は少なかった。誰かひとりが一方的に教え諭すのではなく、自分の話題をたまたま同席した他者に委ねる姿勢が目立った。そうした参加者の姿勢によってオープンな雰囲気がつくられていたことが、前出のような広がりを生んだのだろう。

当人の中で結論づけられておらず、なぜ関心があるのかも定まっていないうい付きを他者に話す機会を持つことはなかなか難しいが、一方でそうした言葉にならない、その人なりのひっかかりは思いがけず地域にとって重要な気付きであることもある。アートプロジェクトの実践者の中には、そうした整理がつかないことに一歩踏み込んで活動を起こした人もいると考えると、「へそちゃ会」は活動の入り口に立つ前段の、助走し始めるきっかけを開くだろう。（鈴木 一郎太）

Consultation | 相談窓口

アートプロジェクトの主催者、アーティストや文化拠点の運営者、舞台関係者、アーティストとのネットワークを構築したい企業、アマチュアとして活動している人など、県内を中心に文化・芸術を軸として活動を行う方々をサポートする無料相談窓口を開設している。相談者の希望や相談内容に応じ、アーツカウンシルしずおかのプログラム・ディレクター、コーディネーターをはじめ、法律、税務、経営の各専門家、文化芸術分野をはじめ、幅広い見識を持つ特別相談員が相談員となり対応している。

● 2021年度相談件数

相談内容	件数
活動	45
助成	30
運営	22
企画内容	22
情報提供(照会)	21
マッチング	10
広報	1
その他	7
合計	158

● 相談対応者

● プログラム・ディレクター、コーディネーター

● 弁護士・税理士・中小企業診断士

※本年度提携している方々：

植松真樹弁護士

桜田武己税理士

河原崎紗綾香中小企業診断士

● 平野雅彦特別相談員

【平野 雅彦】

元ふじのくに文化情報センター長。国立大学法人静岡大学人文社会科学部客員教授。静岡県広報業務アドバイザー。各種コンクール審査員、芸術祭ディレクター、執筆、パネルディスカッションのコーディネーター等多数。

● 相談者の声

【相談内容】

静岡県内の文化芸術支援や助成金の情報が知りたい。(演劇関係者)

▶ 相談員からの助言

県内で助成金を出している財団や団体、企業等を紹介。また、その助成制度の内容を資料を見ながら説明。併せて、文化芸術支援につながる催し等の情報提供を行った。

● 相談者の声

助成金や顕彰の案内資料をいただきありがたかったです。また、相談をしたことで、活動していくためのエネルギーをもらいました。

【相談内容】

コロナ禍での活動や広報、集客に関してアドバイスがほしい。また、静岡県内で活動するうえでどんなことを意識すればよいか相談したい。(音楽団体)

▶ 相談員からの助言

あまり積極的な宣伝ができない時だからこそ、身近な人や団体に向けて宣伝するなどして自身を売り込み、新たなファンを作っていくことができるのではないだろうか。そしてコロナ禍があげた時に、地域に密着した活動が、結果的に活動の幅を広げている可能性がある。

● 相談者の声

貴重なご意見、アドバイス等大変参考になりました。相談している中で出たキーワードや主要な場所等、まずは地域の方々と出逢っていくことから始めたいと思います。

【相談内容】

普段は練り物を販売している会社だが、直売所開設にあたり露店や屋台のようなものを作り、そこにアートも取り入れたいと思っている。何かアイデアがほしい。(練り物販売店)

▶ 相談員からの助言

お祭りでみんながワイワイと集まるような、なんだか楽しくなる露店や屋台になるといいかもしれない。文化や芸術に理解がある建築デザイナーを紹介する。

● 相談者の声

ご紹介いただいた設計事務所さんにデザインを依頼し、リヤカーをモチーフにした素敵な屋台の直売所ができました。次の100年にふさわしいデザインです。ご相談させて頂いて本当に良かったです。ありがとうございました。

Promotion | 広報資料

2021年4月

● アーツカウンシルしずおか ホームページを開設

<https://artscouncil-shizuoka.jp/>

● アーツカウンシルしずおか SNS (Facebook, Instagram, Twitter) を開設

2021年9月

● アーツカウンシルしずおか You Tube チャンネルを開設

● アーツカウンシルしずおか

リーフレット作成 (A4判カラー・8ページ)

● 「2021年度文化芸術による地域振興プログラム」のご紹介

リーフレット作成 (A4判カラー・6ページ)

● オンラインセミナー「お点前ちょうだいいたします」

フライヤー作成 (A4判カラー両面)

2022年2月

● アーツカウンシルしずおか ホームページ内に

「クリエイティブデータベース」を開設

静岡県内を中心に活動するアーティストやクリエイター、文化団体、文化施設等の情報を掲載、データベース化



▲ アーツカウンシルしずおか リーフレット

▼ 「2021年度文化芸術による地域振興プログラム」のご紹介 リーフレット



▼ オンラインセミナー「お点前ちょうだいいたします」フライヤー



2021

アーツカウンシルしずおか
アニュアルレポート

ARTS COUNCIL SHIZUOKA ANNUAL REPORT 2021

2022 年 4 月発行

発行 ——— アーツカウンシルしずおか（公益財団法人静岡県文化財団）
〒422-8019 静岡県静岡市駿河区東静岡 2-3-1 グランシップ 1F
TEL (054)204-0059 FAX (054)288-8180
Mail | info@artscouncil-shizuoka.jp
Web | <https://artscouncil-shizuoka.jp>

デザイン ——— 株式会社スタジオムーン

印刷・製本 ——— 星光社印刷株式会社

2021

アーツカウンシルしずおか
アニュアルレポート

**ARTS COUNCIL SHIZUOKA
ANNUAL REPORT 2021**



アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA